

学 内 広 報

for communication across the UT



特集：■第9回東京大学ホームカミングデイ特集

すべての東京大学卒業生のための祭典 第9回東京大学 ホームカミングデー開催



毎年人気の落語会は東京銀杏会主催



張富士夫赤門学友会長



東大LB会主催のサッカー対抗戦



懐徳館にて茶道部員によるお茶会



本郷いちよう藝術祭

2010年11月13日(土)、秋晴れのもと、「第9回東京大学ホームカミングデー」が開催されました。来場者は約4600人。ご家族連れで母校を訪れた方々も多く、天候に恵まれたこの日、本郷キャンパスはいつもと違った賑わいをみせました。

歓迎式典では濱田総長から「東京大学の行動シナリオでは、卒業生との緊密なネットワークの形成という柱を設けております」、「ご経験を活かして国際化や大学の企画運営の相談にのっていただき、またタフな東大生を育てる、学生たちを鍛えるにあたって、同窓生にお力やお知恵をお借りしたい、そういう場を増やしていきたいと考えておりますので、ぜひご協力をお願いいたします」との挨拶がありました。

引き続き、張富士夫赤門学友会長より挨拶をいただき、江川雅子理事より大学近況報告がありました。その後、「ただひとつ」を斉唱し、式典を終了しました。

「社会が変わる、ベンチャーで変える、東大が変える！」

「東大そのものがベンチャーでなくてはならない-濱田総長」



第1部 基調講演

今の日本は、いささか自信をなくしつつあります。しかし少なくとも東京大学にかかわる人間は、元気であり続けることが、社会的責任・役割であると思っています。皆様には閉塞感の漂う時代に、敢えてリスクをとって次の時代を生み出していく、そういう役割を担っていただきたいと思います。リスクをとるということは、アントレプレナーシップを持って、ということに重なります。そうした精神を持ち続けていただきたいと思います。

私も専門の法律学で、法制度がどうして変化するのか研究していた時、アントレプレナーシップに触れたことがあります。法律は固定したものであり、起業家精神とは正反対だと受け止められがちです。法制度は規範ですから、変化していく動因は、それ自体にはありません。法制度がすべてを規律しているのであれば、それを変える力というのはどこにあるのか。

そのときに手掛かりにしたのは、フランスの憲法学者モーリス・オーリウの考え方でした。規範の世界だけで考えると、規範を変える力はできませんが、規範が存在している社会という事実状態を考えると、主観のイニシアティブ、個人のもつ創造的な自由が法制度を変えていく契機になります。

フランスの哲学者でアンリ・ベルクソンも、「生物の進化というのは、必ずしも機械論理

的、因果論的に進むわけではない。ある段階で内的能動的な跳躍(生命の跳躍)がある」と言っています。つまりアントレプレナーシップというのは、制度が生まれる、制度が進化するために不可欠なものであり、変化に真正面から向き合わなければいけない時代は、創造的な自由の方に、アントレプレナーシップの側に、大きく秤を傾けていく必要があります。

アントレプレナーに必要なのは、情熱に裏打ちされた強い志をもっていること。そして人や組織を動かし、変革を実現させるためのしたたかさを持っている、一言でいえばタフであるということだと思います。

「知」「志」「したたかさ」の3つの要素によってこそ、事業の成長のために必要なリスクマネーを獲得し、チャレンジ精神にあふれるスタッフを集め、果敢に顧客にアプローチすることができるのだと思います。東大生がこうしたアントレプレナーシップをわがものとするにより、閉塞感の闇の時代を大いなるチャンスの時へと変えることができるはずです。

本日は、アントレプレナーシップにあふれる起業家にお集まりいただきました。世代こそ違いますが、明日の社会のために立ちあがった皆様は、将来を担う若い方にとってのロールモデル、タフな東大生のひとつの将来像です。東大発ベンチャーが変えつつある「今」を大いに語っていただきたいと思います。

◆パネリスト

飯塚哲哉氏
(1975年 大学院工学系研究科博士課程 修了)
ザインエレクトロニクス株式会社 代表取締役社長

岩瀬大輔氏
(1998年 法学部 卒業)
ライフネット生命保険株式会社 代表取締役副社長

巖 浩氏
(1993年 大学院医学系研究科博士課程 修了)
イーピーエス株式会社 代表取締役社長

出雲充氏
(2002年 農学部 卒業)
株式会社ユーグレナ 代表取締役社長

◆モデレーター

各務茂夫教授
東京大学産学連携本部事業化推進部長

◆司会

佐々木恭子氏
(1996年 教養学部卒業)



佐々木恭子氏



各務茂夫教授

第2部 パネルディスカッション

起業を決断させ、実行させたものは？

飯塚 東芝に16年在籍し、フレキシブルに好きなことをさせていただきました。リスクを感じるよりも高揚感の中で起業。ただリスクを克服する自信がなければ事業を起こしてはいけないと思います。

巖 東大にいて大変よかったことはプロジェクトが多く、言いかえればチャンスが多かったわけです。学生でありながら、いろいろな仕事をやらせてもらえました。医学統計や臨床試験の設計などをやり、これが会社を設立するひとつのきっかけになりました。

岩瀬 6年前にハーバード【編集部註：ハーバード大学】の経営大学院に留学し、卒業前に投資家と運命的な出会いがありました。「日本には若い起業家が足りない。ビジネスプランは何でもいい。僕はできる限りのことをする」「自分にしかない、ユニークな個性とエッジを活かした生き方してみないか？」と言われたことがきっかけです。生命保険会社で35年のキャリアがあり、現在のパートナーとなる人間を紹介されました。彼は「ベンチャーを通じて競争をしかけることで、変革を迫りたい」と語り、新しいスタイルの生命保険会社を立ち上げました。

出雲 すべての栄養素を作ることができるミドリムシの能力に注目。世界中で実現できなかった大量繁殖に成功し、人類の健康のため、地球の環境のためにクリーンなエネルギーのために会社を設立しました。

総長 学生たちにタフになれと言ってきたのは、知識があるのだから、プラスタフになれ、そうすれば鬼に金棒だという意味でした。しかし本日のお話ですと、「知識があるとリスクを考え過ぎてしまう」「ビジネスプランは関係なく、志があればいい」「日本では、学歴の高い人に『ただ飯志向』がある」と。

ベンチャー支援のメニューがある東大。次のステップへの提案は？

飯塚 裾野を増やす環境を作って欲しい。元気な海外に行くチャンスを作って欲しいと思います。はつらつとして何かをした人は必ず、海外で若い時期に影響を受けた人。上海に行って、シリコンバレーに行ってみてくれと思っています。こんな世界もあったのか、と若者なりに掴むはずです。

巖 ITが進んで学生が真剣な議論をする、わけがわからない本を読む、あるいはもつと悩む、そういう経験が少なくなっていると感じます。それが栄養として社会に出てから効いてきます。学生のうちはいろいろ悩んだほうがよいと思います。

岩瀬 ハーバードに行って驚いたのは、「君たちは恵まれているのだから社会に恩返しをしなければいけない」と言われたこと。いい意味でエリート意識が強い。東大でも学生たちに、社会を変える責任をもっているんだ、と強く言っていたきたい。

出雲 アメリカでは、卒業生が日常的に母校や研究室に帰ってきて学生たちと話します。いろいろなベンチャーの事例があって、知らず知らずのうちに影響を受けます。先輩方に足繁く大学に通っていただくことで、意外に学生の意識が変えられるのではないかと思います。



チャレンジできる環境にある学生たちが何かをやるうとする時、「知識」をタフさを強めるために使えないだろうか。「知識」を前に出ようとする時のサポートにしたい。

それが東大の大学教育の課題だと思います。本日はありがとうございました。

「憧れが一番のエネルギー源。
キャンパスで先輩と接する機会を(出雲)」



出雲 充氏／ユーグレナ(和名ミドリムシ)を中心とした微細藻類に関する研究開発及び生産管理、品質管理、販売等を展開する「(株)ユーグレナ」を設立(2005年)

「ベンチャーが必要としているのは
クレジット。支援をする一社目に
手を挙げて欲しい(出雲)」

「東大生には社会に変革を
起こす責任がある。
チエンジメーカーになれ(岩瀬)」



岩瀬 大輔／インターネットを主な販売チャネルとする新しいスタイルの生命保険会社「ライフネット生命保険(株)」の設立に参画(2006年)。2009年から現職

「ベンチャーは低リスク、ハイリターン。
そこに気づいたら自由になれた(岩瀬)」

「傍流こそ新しいもの生み出す。
東大はそういう環境をもっている(巖)」

「自らリスクをとらず、誰が
リスクをとるんだという
学生が増えている(各務)」

「リスクはやむを得ずでてくる障害。
どう克服するかが重要(飯塚)」

「大企業であれ、稟議書を書くのは人。
その人たちが共感してくれるかどうかです(岩瀬)」

「高学歴の人ほどリスクを
意識しすぎる傾向にある(巖)」

「ミドリムシを
使ってできるくらい
ベンチャーは身近(出雲)」

「企業の資産は人材。
事業を始める人間に
価値がある(飯塚)」



飯塚 哲哉／アナログとデジタルの双方に通じたLSIの企画・設計・販売を行うファブレス(工場を持たない)半導体メーカー「ザインエレクトロニクス(株)」を創立(1991年)

「異国・異分野・異時定数
三異の時代を勝ち抜け(飯塚)」



巖 浩／医薬品開発に必要な臨床試験に関わる業務を、アウトソーシングにより請け負う専門企業「イーピーエス(株)」を設立(1991年)

「東大生だからこそ、ベンチャーたれ。
再起の可能性は高いはず(巖)」

【理学部】

小柴ホールにおいて、学部卒業生で科学作家として活躍されている竹内薫氏による講演会や、現役学生による学生生活の紹介、池田菊苗名誉教授の「うま味」発見功績映画の上演が行われた。参加者は42名。イベント終了時には、理学部紹介冊子「リガクル」や、竹内氏の著書等のプレゼントを行った。



今年の講演会は、翻訳支援サイト「みんなの翻訳」(<http://trans-aid.jp/>)を立ち上げた影浦峯教授(図書館情報学)に講師をお願いした。ユーモアと知的刺激にあふれたレクチャー(演題「翻訳と多言語環境」と活発な質疑応答の後、生協第二食堂に移動して「第一回同窓の集い」を挙げる。講演会、パーティの参加者はそれぞれ82名と85名。

【教育学部】



【経済学部】

貝塚 啓明 金融教育研究センター長(名誉教授)の講演
参加者:約150名
演題:「日本の財政赤字」
時宜を得た興味深い話題であったため、熱心な参加者が多く、講演終了後の質疑応答の時間が足りないほど盛会であった。



【公共政策大学院】

17:00より法学政治学系総合研究棟204号室にて、『公共政策大学院主催第4回ホームカミングデイ懇親会』を開催。教職員・卒業生・在校生計100名弱と多くの方々にご参加いただき、賑やかな集いとなった。今後も、人との繋がりの大切さを感じられる懇親会を開催していきたい。



【薬学部】

東大薬友会(薬学部同窓会)は最高顧問柴田承二先生を迎えて役員会・総会・懇親会を開催。国際化の一環として韓国・台湾各東大薬友会代表、季殷芳先生、張文昌先生が出席された(写真)。
恒例の講演会は、学外・荒金久美先生(コーサー執行委員、昭54年卒)、学内・阿部郁朗先生(天然物化学教授、昭59年卒)による革新的な内容。懇親会は、復活を果たした藤井基之参議院議員(昭44年卒)も加わり、賑やかで時を忘れた。



【史料編纂所】

史料展覧会を開催。耐震補強工事の期間中、史料編纂所では国宝や重要文化財の貴重史料をふくむ原本の史料を避難させていたが、これら史料原本の復帰を機に、ホームカミングデイに合わせて展示開催する運びとなった。入場者数920人。



【農学部】

農学生命科学研究科では、ホームカミングデイの午後、弥生講堂一条ホールにて行った記念講演に、OB教員や留学生だった者を含み、多くの卒業生が集まった。講演に先立ち、生源寺研究科長から研究科の近況報告があった。講演は、応用生命化学専攻の藤原徹教授による「植物の栄養と生育改善」と、水圏生物科学専攻の落合芳博准教授による「タンパク質が語る魚介」の講演を行い、その後教職員も加わり、弥生講堂アネックスにおいて、和やかに懇親会が開催された。



【図書館】

総合図書館では附属図書館特別展示「総合図書館貴重書展: 原資料の保存と電子化による情報発信」を開催した。多くの方々が熱心に観覧され、ご家族の皆さまとともに楽しまれている卒業生の姿も見受けられた。

【法学部】

法学部の企画として、藤原帰一教授による講演会「国際関係は変わったか—— 国際政治における不易と流行」を法文1号館22番教室において開催した。多くの聴衆が集まり、卒業生にとっても興味深い話で、講演終了後も同教授と講演内容について熱心に話し合う姿が見られた。



駒場キャンパス

駒場キャンパスでのホームカミングデイは、2008年建築協会賞(BCS賞)を受賞した駒場コミュニケーション・プラザでのオープニングセレモニーで幕を開けました。山影進教養学部長の挨拶に続いて行われた、第8回教養学部選抜学生コンサートでは、スタインウェイフルコンサートピアノを奏でるピアノ独奏曲などが演奏され、会場の聴衆が魅了されました。

恒例となった「駒場の樹木を楽しむ会」では、芝野博文北海道演習林長による「富良野の森を歩く」と題した講演会が行われた後、芝野先生の引率によりキャンパス内を散策。樹木へのネームプレートの取り付けが行われました。

また、数学ライターの中村 亨氏による講演会「『数学を『見せる』！ - 深夜の数学番組が5年目に突入した秘密 - 』」には、多くの聴衆が集まり、駒場博物館では特別展「真空から生まれる科学と技術 - アリストテレスからカミオカンデまで -」、駒場図書館では企画展「知の伝承と駒場図書館」を開催。夕刻のレセプションは教職員のOB・OG会であるベテラン会を始め、最近卒業された方までが、駒場の過去・現在・未来を語り合いました。当日は各学科の同窓会が開催され、述べ参加者数520名という多数のご参加をいただきました。



オープニングセレモニーで挨拶する山影教養学部長



駒場の樹木を楽しむ会でキャンパス内の樹木を説明する芝野北海道演習林長

新企画イベント



討議に熱中する参加者



ワールドカフェ ホームカミングデイスペシャル

参加者約150名／御殿下記念館



キーンノットスピーカークの
李鍾元立教大学副総長、
田中明彦理事(副学長)、
江川雅子理事

International Alumni Forum 外国人同窓生の集い

参加者約80名／山上会館



卒業30周年学年会

参加者約180名／中央食堂

※2011年対象者は
1977年(昭和52年)入学・1981年(昭和56年)
卒業・1983年(昭和58年)医学部医学科卒業の方

ご協力ありがとうございました。2011年は10月29日(土)開催です。
問い合わせ先：本部卒業生課 内線21216

NEWS

秋の紫綬褒章受章

吉川 洋 大学院経済学研究科・経済学部教授

この度、吉川洋教授（大学院経済学研究科長）が、理論経済学の研究における功績により本年秋の紫綬褒章を受章されました。

吉川洋教授は、永年にわたり、経済学、特にマクロ経済学の分野の研究、教育に努めてきました。社会科学としてのマクロ経済学



には、学派という点からは、市場メカニズムの役割を重視する「新古典派経済学」と市場の失敗と政府の役割を重視する「ケインズ経済学」という2つの世界的潮流が、また、研究テーマという点からは、短期のマクロ現象を取り扱う景気循環理論と、中長期的なマクロ現象を取り扱う経済成長理論があります。1980年前後以降は、米国を中心としたマクロ経済学の流れは、ケインズ経済学から離れ、新古典派経済学へ大きく傾きましたが、2007年以降の金融経済危機の中で、学界の流れはまた新古典派経済学から大きく離れつつあります。

吉川教授の研究の大きな特徴は、以上のような学界の流行の浮き沈みに惑わされることなく、一貫してケインズ経済学の立場から研究を続け、理論だけでなく、その日本経済への応用にも多大な成果を残した点にあります。設備投資や為替レートの動き、またその日本経済への応用に関する業績は、多くの研究者によって引用されています。また、最近では企業や家計のミクロ的な行動の集計の問題に経済物理学的な手法を用いる研究も進めています。

吉川教授はこれらの業績に対して、日経経済図書文化賞、サントリー学芸賞、エコノミスト賞、読売・吉野作造賞等多数の受賞に輝いていますし、日本経済学会長も務めています。また、財政制度審議会、社会保障国民会議、税制調査会委員等、数多くの政府の審議会等での活躍に加えて、合計7年近くにわたって、内閣府経済財政諮問会議議員を務め、経済学の現実の政策決定への応用の面で大きく貢献しました。さらに現在は東京大学大学院経済学研究科長を務めています。経済学の研究、教育、

そしてその社会への普及の各面での功績はまことに顕著です。

これからも吉川教授の益々のご活躍とご健勝を祈念いたします。

（大学院経済学研究科・経済学部 植田和男）

儀我 美一 大学院数理科学研究科教授／理学部教授

大学院数理科学研究科、理学部数学科の儀我美一教授が、数学の研究、とくに、非線形偏微分方程式の研究における顕著な功績により、紫綬褒章を受章されました。



儀我教授が、ナビエ・ストークス方程式に関する優れた業績（博士論文）により非線形偏微分方程式の研究にデビューしたのは1980年代の半ばですが、以来、儀我教授は最近の四半世紀における非線形解析学の進歩を特徴付ける、世界的な成果をいくつも挙げて来られました。対象とした方程式の多くは、流体力学、燃焼理論、材料科学、結晶成長、画像処理などに関わるものであり、儀我教授の成果は21世紀の解析学の未来を拓く役割を果たすと共に、科学技術の先端において広く応用されています。

現象と関わる解析学の推進は、「対象（問題意識）」、「概念（考察の枠組み）」、「方法（解明・解決の手段）」の三つの視点から視ることができます。儀我教授の研究スタイルの特長は、この三視点のすべてにおいて顕著な独創性と展開力です。それによって解の存在や構造が解明され、信頼できるモデルや計算法が導かれました。ここでその多くに触れることはできませんが、典型例を挙げれば、（結晶表面のような）界面の運動を記述する曲率流方程式の研究です。微分幾何学や材料科学・画像処理にも影響を及ぼしたこの研究では、界面の「ちぎれ」などの特異性に耐える「広義解の概念」の設定、および、曲面をある関数の等高線（面）とみなす「等高面の方法」の導入が画期的です。また、非線形放物型方程式の解の「爆発」の研究も日本発祥の分野（H. Fujita, 1966）ですが、近年の進歩の土台は「解の自己相似性」の意義を見抜いた儀我教授の方法にあります。

儀我教授は、創造性豊かな研究グループの形成および才能を引き出す人材育成に於いても顕著な実績を挙げられました。数学およびその応用の進歩のために、儀我教授の益々のご発展を祈ってやみません。

（大学院理学系研究科・理学部 名誉教授 藤田宏）

化学生命工学専攻の相田卓三教授が、本年秋の褒章発令において、学術、芸術、技術開発等の功労者を対象とする紫綬褒章を受章されました。



相田教授は長年にわたって、高分子化学を基盤に、機能性ナノ材料の創製において独創的な研究を先導してられました。具体的な成果としては、樹木状分岐構造を有する高分子化合物 dendrimer の光捕集アンテナ機能の発見や、メソ多孔性シリカのナノ空孔を用いた押し出し重合による高強度ファイバーの合成、刺激応答性分子機械の開拓などを手がけ、最近では、98%が水からなるプラスチック“アクアマテリアル”の開発を報告され、次々と優れた新しいアイデアに基づく研究成果を発表しておられます。

またその一方で、科学技術振興機構 ERATO「相田ナノ空間プロジェクト」、および後継の ERATO-SORST プロジェクトを率い、パイ電子系を中心とした機能性分子の自己組織化を利用し、カーボンナノチューブ・イオン液体複合ゲル（バッキーゲル）の発見を端緒とした、伸縮性導電材料などの様々なデバイスに応用可能な素材の開発、光で電気を流すグラファイトナノチューブの開発と応用など、分子配列が空間特異的に制御された新規な電子・磁気・光機能性ソフトマテリアルなどの開発にも精力的に取り組んでおられます。

以上のように、相田教授の業績は、学術面における、いわゆるベーシックサイエンスへの多大な貢献だけに留まらず、現代における環境・エネルギー・資源問題に対する新しい価値観の提示にも及んでおります。さらに、これらの研究を舞台にして若手人材育成や国内外の研究者交流に情熱をもって取り組まれ、多数の卒業生や研究人が国内外のアカデミアや企業へ輩出しています。

相田教授は、これまでに、日本化学会賞、井上學術賞、日本 IBM 科学賞など数々の栄誉に輝いておられ、2009年にはアメリカ化学会賞をご受賞されるなど国際的にも非常に高い評価を受けております。今回の褒章を契機に、さらなる研究のご発展をお祈り申し上げます。

(大学院工学系研究科・工学部 加藤隆史)

生田 幸士 先端科学技術研究センター教授

生田幸士教授（先端科学技術研究センター）が、医用生体工学研究における「医用マイクロマシン」分野の創成と発展の顕著なご功績により、本年秋の紫綬褒章を受章されました。



生田先生は、医用生体工学の分野で、マイクロマシンという

概念が導入されるはるか以前から、素材開発にまで遡る独創的研究アプローチで、先駆的にマイクロ・ナノテクノロジーの医学応用研究に取り組んでられました。80年代初頭から、微小なアクチュエータの重要性を見抜いて、形状記憶合金を用いたマイクロアクチュエータの先駆的研究を進められ、1986年には世界初の能動内視鏡の開発に成功されました。また、1992年には、当時、MEMS 分野で主流であった半導体プロセスに基づく2次元微細加工技術に対し、3次元の微細構造を作製できるマイクロ光造形法（IH プロセス）を世界で初めて開発されました。さらに、マイクロ・ナノ光造形法と光トラッピング手法に独自の創意工夫を進められ、水中駆動できる世界最小サイズのマイクロマシンを実現されました。そして、このようなマイクロマシンが、細胞や生体分子の微細操作と微小力計測に応用できることを世界に先駆けて示され、マイクロ・ナノマシン技術と生物・医学分野との学際領域を開拓されました。今や次世代医療の基盤技術として、世界中で数多くの研究者が、この医用マイクロマシン領域の研究に取り組んでいます。

生田先生は世界をリードする研究者であられると同時に、創造性教育にも尽力してられました。「創造的な研究者こそが、創造的な青少年を育成できる」との信念のもと、大学での「卵落としコンテスト」や「ロボットコンテスト」等の名物講義、「マイクロマシン工房」や「ナノアート展」など青少年に最先端の研究成果を伝える教育活動にも情熱を注がれ、社会的にも大きく貢献されています。

これらのご功績により、市村学術賞、アメリカラボラトリーオートメーション学会功績賞、日本機械学会フェローなど、数々の栄誉に輝かれています。生田研究室門下生一同、この度の紫綬褒章ご受章を心よりお祝い申し上げますとともに、先生のご健勝とますますのご活躍を祈念しております。

(先端科学技術研究センター 池内真志)

三品 昌美 大学院医学系研究科・医学部教授

三品昌美教授（大学院医学系研究科・医学部）が「神経伝達物質受容体の構造と機能、及び脳高次機能の分子基盤に関する研究」におけるご功績により、本年秋の褒章において紫綬褒章を受章されました。



私たちの脳内に存在する1,000億もの神経細胞は互いにシナプスと呼ばれる連結部を介して複雑かつ整然と連絡しあい、様々な脳機能の基盤となる神経ネットワークを形成しています。この多様なシナプスが生み出す複雑さのために、脳神経系は生命科学最後のフロンティアとされてきました。三品先生は遺伝子・分子レベルから高等動物

の脳神経系の担う様々な機能を理解する分子脳科学分野のリーダーとしてこの分野の発展に多大な貢献をされました。

三品先生は1980年代に代表的な神経伝達物質受容体である筋肉のアセチルコリン受容体の分子実体を明らかにし、遺伝子から機能を有する受容体を発現・再構築することに世界で初めて成功されました。更に、アセチルコリン受容体の構造と機能の関係を解析することにより神経系の情報伝達の分子基盤を明らかにされました。これらの研究は、分子生物学・生化学と生理学を総合的に駆使して脳神経系を探求する端緒となるものでした。その後、脳内の興奮性神経伝達を担うグルタミン酸受容体に着目され、その多様性、構造および機能を明らかにし、脳神経系の情報伝達と可塑性を分子レベルで解明されました。さらに、グルタミン酸受容体遺伝子を欠損したマウスを作製して、グルタミン酸受容体が脳の発達や記憶・学習などの脳高次機能の基盤となっていることを明らかにされました。脳の高次機能の分子基盤に関するこれらの先駆的な研究成果は基礎生命科学のみならず医学分野においても高く評価されています。

現在は学内外の要職を務められ、多忙を極めておりますが、研究活動においては一切の妥協を許さず脳の理解に取り組んでおられます。

研究室一同、ご受章を心よりお喜び申し上げますと共に、今後益々のご活躍を祈念いたします。

(大学院医学系研究科・医学部 吉田知之)

文化勲章受章

有馬 朗人 名誉教授 (大学院理学系研究科・理学部)

有馬朗人先生の文化勲章ご受章に心よりお祝い申し上げます。

有馬先生は昭和28年本学理学部を卒業、同31年に同大学院理学系研究科博士課程を退学して本学原子核研究所助手に就任、同33年に本学より理学博士の学位を授与されました。その後、本学理学部物理学教室講師、助教授を経て同50年に教授になりました。大型計算機センター長、理学部長、平成元年から平成5年には総長になられるなど、本学に様々な貢献されてきました。この間、「大学貧乏物語」で当時の大学の窮状を社会に訴えられたのはよく知られています。その後も、理化学研究所理事長、参議院議員、文部大臣などを務められ、我が国の学術・教育に多大の尽力をされました。現在も武蔵学園長、静岡文化芸術大学理事長をなさっています。

先生の専門は原子核物理学で、それへの貢献が受章の



主な理由です。研究を始められた頃は原子核物理学が誕生した時期でもあり、様々な課題において分野を立ち上げる研究をされました。中でも有名なのは、当時メイヤーとイェンゼンによって提案されたばかりの殻模型において、実際の核力がいかに働くかを示す有馬-堀江の配位混合理論です。これは今も多くの研究者によって発展を続けている有効相互作用、有効電荷の研究の端緒であり、今日の原子核物理学のさらなる発展の礎になっています。さらに、原子核のクラスター模型を始められ、また、原子核の表面を球から楕円体に変形させ回転や振動を起こす集団運動に関して、相互作用するボソン模型をやケロ博士とともに提唱され、その統一的記述に成功しました。現在も、研究活動を続けられ論文を毎年出版しています。このような貢献に対し、仁科記念賞、フンボルト賞、フランクリン財団ジョン・プライス・ウェザリル・メダル、アメリカ物理学会ボナー賞、日本学士院賞などを受賞されています。一方、俳人としても著名で「天為」という会を創始され主宰しています。

(大学院理学系研究科・理学部 大塚孝治)

安藤 忠雄 名誉教授 (大学院工学系研究科・工学部)

本学名誉教授・特別荣誉教授の安藤忠雄先生が本年度の文化勲章を受勲された。安藤先生は世界的建築家としてすでに有名で、国内外での数多くの優れた現代建築作品が知られている。そうした作品群のなかでも、今回はとりわけ既存の環境や歴史的な文脈を配慮した建築設計活動が評価されて文化勲章受章の荣誉に輝かれた。わが建築学専攻はもとより本学全体の宝である安藤先生のご受章を心からお祝い申し上げますとともに喜びを分かち合いたい。



安藤先生は1997年 東京大学工学部教授に就任され、2003年定年退職されるまでの5年半、精力的な設計活動のかたわら本学の教育に邁進され、多くの後進を育てられた。東京大学在職時代の教育活動として、大学院講義をまとめた『建築を語る』(東京大学出版会、1999年)、『連戦連敗』(東京大学出版会、2001年)などがある。いずれも安藤先生の建築への夢、建築のもつ社会的な重要性などが多角的に語られ、これから建築を目指す学生たちへの熱いメッセージとなっている。

安藤先生は東京大学ご退職後も「安藤スクール」と称して毎年数人の学部学生が古建築の研究とともに建築設計・施工の現場を経験できる制度を始められたり、優秀な学生を表彰し奨学する「ジョサイア・コンドル賞」「伊東忠太賞」の設置にもご尽力いただいております。さまざまな側面からの学恩はいままなお継続している。

先生の建築は1976年の「住吉の長屋」(日本建築学会賞)が実質上のデビュー作であるが、1984年の「六甲

の集合住宅」(日本文化デザイン賞)、87年「六甲の教会」(毎日芸術賞)頃からわが国を代表する建築家として国際的にも認められるようになり、ユネスコ本部瞑想の空間、フォートワース現代美術館など海外の作品も続々と発表された。また阪神淡路大震災後の復興や香川県直島町における一連の設計活動、国際子ども図書館など、近年の作品には建築家としての社会的役割を深く認識した、環境・歴史への配慮を全面的に表現したものが多く、これらの作品が共感と感動を呼び、今回の受章につながったものと思われる。本学における安藤先生の作品、福武ホールは2008年に竣工した。

安藤先生は現在69歳、ますますお元気で受章後のインタビューにも今回の受章は「スタートか終わりのどちらか」と述べられ、建築家としての新たなスタートを密かに目論んでいらっしゃるようである。安藤先生のご活躍を大いに楽しみにしたい。

(大学院工学系研究科・工学部 伊藤毅)

文化功労者顕彰

田中 靖郎 名誉教授 (大学院理学系研究科・理学部)

本学および宇宙科学研究所の名誉教授、田中靖郎(たなか・やすお)先生が、本年度の文化功労者に選ばれました。田中先生は1953年に大阪大学理学部物理学科をご卒業の後、本学原子核研究所助手、名古屋大学理学部助教授を経て、1972年に本学宇宙航空研究所教授に着任され、飛翔体を用いた宇宙科学の研究に多大な貢献をされました。同研究所が1981年に全国共同利用の宇宙科学研究所として独立の後、理学系研究科に新設された学際理学併任講座の教授として、長らく理学系研究科の大学院教育にも尽力されました。1991年に本学を、また1994年に宇宙科学研究所をご退官の後、マックス＝プランク研究所の客員科学者としてドイツに滞在され、2008年まで日本学術振興会ボン研究連絡センター長も務められました。



田中先生は宇宙線のご研究を出発点に、1960年代から勃興したX線天文学の先頭に立ち、太陽系を包む高温ガスの先駆的観測、新しいX線検出器の開発、それを搭載した「てんま」衛星によるX線輝線分光学の開拓、「ぎんが」による超新星SN1987Aの検出、「あすか」によるブラックホールからの相対論的効果の検証など、広く深い宇宙物理学を展開され、日本の当該研究分野を大樹へと育て上げられました。先生はつねに広い視野に立ち国際協力を推進されるとともに、実験物理学者として開発の現場にも透徹した目を配られ、プロジェクトマネ

ジャーとして多くの科学衛星を成功に導かれるなど、その功績は非常に多岐にわたります。

先生はこれまで、仁科記念賞、日本学士院賞、米国ロッシ賞、英国王立協会マッセイ賞などを受賞され、日独学術交流へのご貢献により外務大臣表彰も受賞しております。さらにこのたび、文化功労者として叙せられたことは、誠に先生のご業績にふさわしく、心よりお祝い申し上げます。

(大学院理学系研究科・理学部 牧島一夫)

松尾 浩也 名誉教授 (大学院法学政治学研究科・法学部)

本学名誉教授松尾浩也先生のご業績は、刑事法学をはじめ、裁判法や少年法等にまで広く及んでいますが、その中心は刑事訴訟法分野です。この領域で、先生は精緻で、かつ均衡のとれた理論体系を構築されました。先生は、著しい発展を示していたアメリカ刑事手続法に学び、「実体的真実主義」から「適正手続主義」への刑事訴訟理念の転換を指示して、基本的に「適正手続」モデルに立脚する刑事訴訟法の解釈・運用を提唱されました。この考えは今日の刑事訴訟法学の基調となっています。さらに先生は、ドイツ法等を含むより幅広い比較法的考察とわが国の刑事手続の実態への精察に基づき、欧米とは異なった特性を有する、わが国の刑事手続に適合した独自の刑事訴訟法理論を樹立されました。論文集『刑事訴訟の原理』(昭和49年)に収められた論文等、先生のご著作は、その研究活動の一環として生み出されたもので大きな影響を与えました。先生の刑事訴訟法研究の集成である『刑事訴訟法・上』(初版、昭和54年)、『刑事訴訟法・下』(初版、昭和57年～平成2年)は、わが国の刑事訴訟法学の到達点を示す標準的著作となっています。



大学の運営の面でも先生の果たされた役割は大きく、東京大学法学部長、東京大学の評議員などさまざまな職責を担われました。また、学会関係では、永年、日本刑法学会理事として、学会の運営に積極的に関与され、ことに、昭和60年5月から平成3年5月までは同学会の理事長を務め、刑事法学界全体の歩みを指導されました。

先生は、すでに、その卓越したご業績により紫綬褒章、勲二等旭日重光章を受章され、日本学士院会員にも選定されています。このたび、先生が文化功労者として顕彰されたことは誠に喜ばしい限りであり、これからも、ますますお元気で、刑事立法や後進の指導等においてお力を発揮して下さることを願ってやみません。

(大学院法学政治学研究科・法学部 山口厚)

本学名誉教授藤嶋昭先生が本年度文化功労者に顕彰されました。

藤嶋先生は1971年に本学大学院工学系研究科工業化学専攻博士課程を修了され、神奈川大学工学部専任講師、助教授を経て、1975年より本学工学部講師に着任されました。その後、助教授を経て1986年に教授となられ2003年に定年退職されるまで、本学工学部、および大学院工学系研究科において研究と教育に当たられました。



藤嶋先生は特に電気化学反応をベースとした光機能材料の研究において、卓越した成果をあげてこられました。ご研究の出発点になったのは先生が大学院の学生時代に行った半導体光電極反応です。これは酸化チタン電極に光照射することにより水が水素と酸素に分解されるという現象であり、当時の指導教官であった本多健一先生のお名前と合わせて、「ホンダ・フジシマ効果」と呼ばれています。その後、藤嶋先生は、この半導体光電極反応の研究法を、種々の固体・溶液界面、あるいは固体・気体界面での光化学反応全般へと発展させ、その基礎研究および応用研究の両面において常にこの分野における第一人者として学会をリードしてきました。

さらに1990年代になり、先生は酸化チタンのご研究を、微弱光下での光触媒反応という新たな分野へ展開されました。これは、室内光程度の微弱光を利用した非常に光活性の高い光触媒薄膜コーティング材料を提案することになり、学界・産業界からも広く注目され、現在、光触媒反応を利用した抗菌・セルフコーティング・空気浄化材料・新機能建材など実用技術として広く展開しています。

これら一連のご研究により藤嶋先生は、これまで朝日賞、日本化学会賞、井上春成賞、電気化学会賞・武井賞、加藤記念賞、日本国際賞、日本学士院賞、内閣総理大臣賞、紫綬褒章など数多くの賞を受賞されています。また、先生は、ノーベル化学賞の有力な候補者としても常に名前を挙げられるなど国内外で高く評価されておられます。

藤嶋先生は本学をご退職後、東京大学特別荣誉教授に就任されました。また現在は東京理科大学の学長としてご活躍されています。このたび文化功労者に列せられたことは、先生の業績を顕彰するのに相応しいものとして、心からお喜び申し上げます。

(大学院工学系研究科・工学部 橋本和仁)

一般ニュース

海洋アライアンス

上越教育大学附属中学校との遠隔授業開催

10月15日(金)、海洋アライアンス(機構長 浦環 生産技術研究所教授)は、上越教育大学附属中学校(天野和孝校長)の依頼を受け、メタンハイドレートをテーマにした遠隔授業を実施した。

この企画は、今夏、同中学校の濁川朋也教諭が、海洋アライアンスの福島朋彦特任准教授に、メタンハイドレートを題材にした授業について相談したところから始まった。福島特任准教授が早速、メタンハイドレート研究の第一人者である松本良教授(理学系研究科)を紹介したところ、松本教授から探査技術、地質学的特徴、さらに燃焼実験のコツに至るまでの丁寧な解説を受けることができた。次に濁川教諭は、事前検討用の試料を求めて、独立行政法人産業技術総合研究所の駒井武博士を訪ねた。駒井博士は快く試料提供に応じたうえ、研究開発や試料の取り扱い方の解説にまで時間を割いてくださった。そして本番を控えた9月下旬、授業に使用する試料を定木淳准教授、岡屋克則助教(いずれも工学系研究科)が提供して下さることとなったので、濁川教諭は再び本学を訪れた。長距離運転で上京した同教諭を待っていたのは、増田昌敬准教授(工学系研究科)による実験装置の解説と定木准教授と岡屋助教が準備したメタンハイドレート試料だった。さらに帰り際には、メタンハイドレート試料の生成方法のノウハウも伝授された。

前置きが長くなったが、メタンハイドレートを使った遠隔授業が実施されるまで、学内外の多くの研究者による惜しみない援助があったことを強調しておきたい。

本番の遠隔授業を引き受けたのは、前述の定木准教授である。生徒たちが実際に人工メタンハイドレート試料を生成していたことを知り、随分と驚いたようである。生徒たちは、燃焼実験で自分たちが作った試料が本当に燃えることを確認し、定木准教授と一緒に喜び合っていた。その様子には新潟と東京の距離を感じさせないほどの一体感があった。



メタンハイドレート燃焼実験

メタンハイドレートの開発には技術的な課題が多く、採取方法さえ確立されていないのが現状であるが、生徒たちはそれらの課題をどのようにクリアすればよいか、独自のアイデアを出し合い、毎毎に新たな採取方法を発表した。

講評を求められた定木准教授は「自由な発想に溢れた採取方法で、技術者にとってもよい刺激になります」と生徒たちを励ました。



生徒からの質問に回答する定木准教授

最後に濁川教諭と生徒の感想を紹介する。

「環境と開発を調和的に解決することは、理科教育において最も重要な視点の一つとされています。メタンハイドレートは、まさにESD※にふさわしい教材でした。今回の授業により、エネルギー問題に対する生徒たちの切実感を高め、夢が膨らむメタンハイドレートの実用化に向けての活発な議論展開ができました」(濁川教諭)

※ ESD = 持続可能な開発のための教育

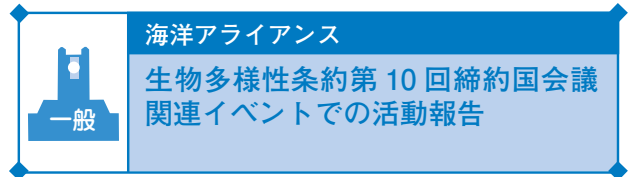
「メタンハイドレートを実用化するためのハードルは高いといえるが、過去の石油開発の時と同様に実現できる日が必ずくると議論を通して確信した。また、東京大学の定木先生から開発の視点や私たちの議論へのアドバイスをいただく中で、技術開発することの喜びや楽しさを味わうことができた。自分たちの未来を何とか切り拓

きたいと思った」(生徒 A)。

今回の遠隔授業の試みは、10月に、海洋アライアンス内に発足した海洋リテラシープログラム(プログラム長 浦辺徹郎理学系研究科教授)の下に設置された海洋リテラシー研究グループ(グループ長 黒倉壽農学生命科学研究科教授)による研究活動の一環として実施したものである。同グループでは、今後も海洋知識の普及のための手法開発に取り組む予定である。

海洋アライアンスホームページ:

<http://www.oa.u-tokyo.ac.jp/>



10月に名古屋で開催された生物多様性条約第10回締約国会議(以下、COP10)に合わせ、海洋アライアンスの教育プログラム「海洋生物の多様性保全と利用に関する学生フォーラム」を受講する大学院生が関連ワークショップでの発表及び、イベント会場でのブース展示を実施した。

10月16日(土)に開催されたワークショップには国際的な研究者や専門家が約20人参加した。海洋アライアンスからは、八木信行特任准教授が世界の漁業対象資源の現状などを発表した。続いて、学生代表である緒方悠香さん(農学生命科学研究科博士課程2年)が、未利用魚の消費を促進するための手段として、色々な魚種を資源状況に基づきスコア付けをして消費者に情報発信する「生物多様性レシピ」を英語で提案した。同じく参加した菅沢承子さん(農学生命科学研究科修士課程1年)、大里和輝さん(新領域創成科学研究科修士課程1年)も、その意義などについて熱心に説明を行った。



学生による発表風景

また、10月23日(土)から28日(木)まで、COP10のメイン会場協にある白鳥公園において、海洋

生物の多様性保全と利用に関する以下の3篇のポスター発表を行った。

1. 日本における禁漁区の実態
- 管理をしている人々の本音からみえるもの -
2. 生物多様性レシビ
- 未来につながる今日のごはん -
3. 里海 - 21世紀の海と人 -

発表期間中、延べ500名以上の方が展示ブースを訪れ、ポスターを見ながら学生たちと活発に議論を交わしていた。学生たちは多くの人と意見交換を通じ、自分たちの提案に対し多様な意見があることを学ぶとともに、この議論を今後の研究活動などに生かしたいと感想を述べていた。



ブース展示の様子

COP10は、難航した交渉の末に名古屋議定書や愛知目標を採択し、閉会した。学生達は、国際交渉を間近で感じ、また人的なコネクションを広げることができた点でも、貴重な経験ができたと言っていた。



名古屋議定書採択直後、参加者が総立ちで拍手



サステイナブルキャンパスプロジェクト (TSCP) 室

東京大学がヒートポンプ・蓄熱シンポジウムにて優秀賞を受賞!

本学では、サステイナブルキャンパスの実現を目指して“TSCP”として、キャンパスのCO₂排出量の総量削減に向け全学的な取組を進めている。

大阪で10月28日(木)開催された「第7回ヒートポンプ・蓄熱シンポジウム」において、この取組のひとつが優秀事例として認められ表彰された。

蓄熱システムの設備改良を含む運転管理等において、改善により効果のあった事例公募があり、TSCP取組事例を応募していた。

事例の附属病院地区はエネルギー消費が多いことから、大学全体のCO₂排出量に占める比率が最も高くなっている。

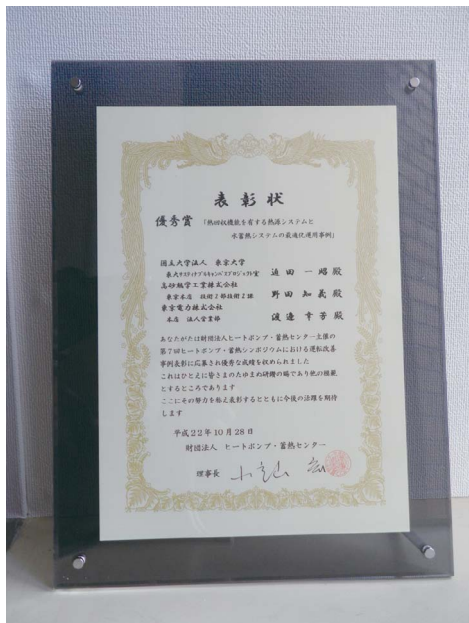
そこでTSCPでは、平成20年度、平成21年度とエネルギー使用密度の高い附属病院エネルギーセンターでの対策を実施することで、効果的に大学全体のCO₂排出量を削減している。

大学自らがCO₂排出総量についての削減目標を立て、全学一体となって行動していることと、データ分析による改修計画、設備改善のみならずその後の運転も含めた対策手法の秀逸さが高く評価されたもので、他大学への水平展開も期待されている。

今後ともサステイナブルキャンパスの実現に向けた取組を進めて参りますので、皆様のご協力をお願いいたします。



シンポジウムでの表彰式



表彰状

本部学生支援課
第34回東京大学伊豆・戸田マラソン大会が開催される

恒例の東京大学伊豆・戸田マラソン大会が、10月31日（日）に開催された。コースは、静岡県西伊豆の東京大学戸田寮（沼津市戸田地区）を基点とする42.195kmのフルマラソンコース、西浦市民窓口横を基点とする21kmのハーフマラソンコースがある。途中で標高差500mの山道を含むなど、通常に比べかなりの難関コースだが、日本有数の景勝地として知られる西伊豆の自然を体感しつつ走ることができるため、参加者から例年好評を博している。



スタート前

台風14号により一時は開催も危ぶまれたが、大会当日は一転して快晴となり、フルマラソンの部、総勢121名（女性11名、卒業生16名、沼津市在住・在勤者8名を含む）が参加し、115名が無事に完走した。ハーフマラソンの部は32名（女性8名、卒業生5名、沼津市在住・

在勤者16名含む）が出走し、30名が完走した。

フルマラソン個人の部は、前回大会の優勝者である卒業生の大井寛己（おおい・ひろき）さんが、2大会連続の優勝を果たした。また、団体の部では、優勝者の大井さんを中心としたチーム「飛走会」が2大会ぶりの優勝となった。

ハーフマラソンの部では、本学卒業生の富山健太郎（とみやま・けんたろう）さんが1時間32分31秒のタイムで優勝した。その他の参加者も好走し、本大会ではフル・ハーフ含め合計145名がこの難コースを完走した。

開閉会式では選手をはじめ本学関係者、地域関係者が多数出席し、交流を深めた。開会式では戸田文化協会会長の山口展徳氏による「戸田の歴史」についての講演があり、レース終了後の閉会式では栗原裕康沼津市長が選手の活躍を称えた。

レース中の沿道からは沼津市民の子供達からお年寄りまでたくさんの温かな声援が送られた。

秋の西伊豆路を周回する伊豆・戸田マラソンへ、来年も皆さんの奮ってのご参加をお待ちしています。



ハーフマラソンスタート風景

第34回東京大学伊豆・戸田マラソン大会結果

【個人の部】 <東京大学総長杯>

順位	氏名	時間	備考
優勝	大井 寛己	2:58:06	卒業生
準優勝	貴田 大樹	3:03:07	農・大学院生
第3位	田辺 克彦	3:06:54	卒業生
第4位	杉浦 大輔	3:13:31	理・大学院生
第5位	工藤 健一	3:13:49	工・学部生
第6位	牧田 浩典	3:14:36	教職員

【団体の部】 <沼津市長杯>

（上位3位の平均順位が少ないチーム）

順位	チーム名	平均順位	備考
優勝	飛走会	9.3位	卒業生
準優勝	獣医薬理 トモダチ	12.0位	学部生・大学院生
第3位	チーム ワタリドリ	35.3位	学部生・卒業生

【女子の部】

順位	氏名	時間	備考
優勝	稲葉 五美	3:55:14	沼津市民

【学内の部】

順位	氏名	時間	備考
優勝	貴田 大樹	3:03:07	農・大学院生

【バカヤロー会長杯】

(真城峠からゴールまで最も順位を上げた人)

順位	氏名	順位変動	備考
33位	角田 裕晶	82 → 33位	理・学部生

【ハーフマラソンの部】 (男子の部)

順位	氏名	時間	備考
優勝	富山 健太郎	1:32:31	卒業生
準優勝	榎本 洋	1:37:30	沼津市民
第3位	山本 稔	1:40:23	沼津市民

【ハーフマラソンの部】 (女子の部)

順位	氏名	時間	備考
第1位	張 柳	1:56:00	薬・学部生

一般

本部財務課

第53回 東京大学対京都大学 財務部職員野球定期戦が開催される！！
《昭和58年以来27年ぶりの“3連覇”達成》

11月6日(土)東京大学農学部硬式野球場において、昭和33年(第1回大会)から続いている歴史と伝統のある「京都大学との懇親野球大会」が開催された。本大会は、毎年交互に東京と京都で実施しているものである。

試合は、部員の日頃の行いが良いこともあって、晴天に恵まれ、ベストコンディションの中、多くの声援を受け本学が勝利することができた。

この勝利で、なんと昭和58年以来27年ぶりの“3連覇”を達成した。

三浦充副理事(財務部長)による始球式の後、独特の緊張感の中で試合が始まり、お互いに引き締った中で試合が繰り広げられた。

1回の裏、本学が先制し試合の主導権を握ると、その後の京都大学の追い上げも振り切ることができた。これも日頃の仕事でのチームプレーの賜ではないだろうか。



三浦副理事(財務部長)による始球式



京都大学の攻撃を封じる東京大学

2年後は、第55回記念大会となる。記念大会は、東京ドームでの開催を予定しており、OB戦も行う。現役選手を凌ぐOBの方々の素晴らしいプレーを見られると思うと、今から大変楽しみである。

本大会の歴史を築いていただいた諸先輩方へ感謝するとともに、これからも財務部一丸となって、仕事でもホームランをかつとばし勝利して、本学を盛り上げていきます。

多くのご支援・ご声援、大変ありがとうございました。



3連覇を達成した財務部野球部員達

○試合結果

(11月6日(土): 東京大学農学部硬式野球場にて)

区分	1回	2回	3回	4回	5回	6回
京大	0	0	0	0	0	0
東大	3	0	0	1	1	0

7回	8回	9回	計
0	1	0	1
5	0		10

本部留学生・外国人研究者支援課



「東京大学外国人留学生特別奨学制度平成22年度10月期研究奨励費受給者証書授与式」を開催

11月10日(水)16時、「東京大学外国人留学生特別奨学制度平成22年度研究奨励費受給者証書授与式」が、小島理事(副学長)臨席のもと、学生支援センター大会議室にて開催された。

本奨学制度は、「大学院において特に優秀な私費外国人留学生に対し研究奨励費を支給することにより、本学での学術研究への取組を支援するとともに、諸外国からの優秀な留学生の受入促進に資する」ことを目的として、平成16年度から実施されているもので、月額15万円が標準修業年限の最終月まで支給される。

本年度10月期は、博士課程9名、研究生1名の合計10名の大学院学生が受給者として決定され、出席した8名の受給者に小島理事(副学長)から受給者証書が手渡された。



東京大学外国人留学生特別奨学制度受給者証書授与

次いで、小島理事(副学長)から「受給者の皆さんは、本制度を受給されることを誇りに思い、学業や研究に専念してください。教職員は大いに期待しています」との挨拶があった。引き続き、受給者を代表して大学院工学系研究科博士課程の林鍾衍(イム・ゾンヨン)さん(韓国)から、「経済的な問題で研究に差し支えがあるのではないかと不安でしたが、東京大学フェローシップに採用されたため、大変助かります。これからは東大フェローの名に恥じないよう、良い研究成果を出すため精一杯がんばります」と感謝の意を表するスピーチがあった。



平成22年度10月期研究奨励費受給者と関係者

<問い合わせ先>

本部留学生・外国人研究者支援課生活支援チーム
内線 22732



本部人材育成課

東京大学教職員永年勤続者表彰式行われる

平成22年度の東京大学教職員永年勤続者表彰式が、11月17日(水)9時45分から、本部棟12階大会議室において、濱田純一総長、佐藤慎一理事(副学長)、久

保公人理事、関係部局長及び関係事務（部）長等の列席のもと行われた。

表彰式では、被表彰者 98 名を代表して、本部学生支援課体育チーム 高尾訓子さんに表彰状の授与並びに記念品が贈呈された。総長から挨拶の後、被表彰者を代表して、医学部附属病院検査部検査第四部門主任臨床検査技師 佐々木賀津乃さんより謝辞が述べられた。



濱田総長から表彰状と記念品を受ける高尾訓子さん



濱田総長に謝辞を述べる佐々木賀津乃さん

なお、本年度表彰された方々は次のとおりである。

教育・学生支援部	伊藤 努 秋本 真利 樋口 壮央 高尾 訓子
研究推進部	佐藤 一昭
国際部	川野辺 創 渡辺 正昭
環境安全衛生部	佐藤 寿 仙名 留美 萩島 隆幸 近藤 浩子
情報システム部	貴志 武一
経営支援部	鈴木 敏之 氏次 健
総務部	下大田 真一 竹下 和宏

人事部	白石 英司 池田 貴志
財務部	野呂 清隆 三澤 毅
施設部	島田 英明 栗原 紀寿
資産管理部	小川 雄一郎
監査課	彗田 健一
附属図書館	大谷 朱美 曾我 典子
情報基盤センター	後藤 和彦 大橋 公一郎 椿山 惣一郎
大学院法学政治学研究科・法学部	田中 茂穂
大学院医学系研究科・医学部	青木 晋 小城 哲夫 佐藤 貴一 小林 正明 宮田 和幸 米村 裕次郎 小林 誠
医学部附属病院	佐々木 賀津乃 眞崎 桂 尾崎 心正 吉井 栄子 山下 敏江 木村 敬子 佐藤 直子 下園 佳代美 平井 美紀 大谷 亜紀子 保屋野 みゆき 高橋 美奈子 井爪 あき 増田 宣子 唐澤 祥嗣 千葉 新吾 仲川 勉 石橋 彰 中山 博司 小宮 一修 横田 政雄 岩田 恭味 櫻井 康子 針原 伸二 和栗 正幸 新井 烈 山口 淳一 村石 昌昭 富安 文武之進 西山 教雄 渡邊 由紀
大学院工学系研究科・工学部	唐澤 祥嗣 千葉 新吾 仲川 勉 石橋 彰 中山 博司 小宮 一修 横田 政雄 岩田 恭味 櫻井 康子 針原 伸二 和栗 正幸 新井 烈 山口 淳一 村石 昌昭 富安 文武之進 西山 教雄 渡邊 由紀
大学院理学系研究科・理学部	櫻井 康子 針原 伸二 和栗 正幸 新井 烈 山口 淳一 村石 昌昭 富安 文武之進 西山 教雄 渡邊 由紀
環境安全研究センター	富安 文武之進 西山 教雄 渡邊 由紀
大学院農学生命科学研究科・農学部	西山 教雄 渡邊 由紀

大学院経済学研究科・経済学部
大学院総合文化研究科・教養学部

大学院教育学研究科・教育学部

大学院新領域創成科学研究科
大学院情報理工学系研究科
大学院情報学環・学際情報学府
医科学研究所

地震研究所

生産技術研究所

分子細胞生物学研究所
物性研究所
大気海洋研究所

先端科学技術研究センター
数物連携宇宙研究機構

柏地区共通事務センター

小澤 靖
天山 学
森口 広美
新海 美江子
原 正信
吉野 衣子
牛腸 徹
石川 瑞穂
梅原 章太郎
檜府 暢子
佐藤 公一郎
加藤 一弘
大坪 一郎
寺内 博貴
山崎 隆行
池上 徹
浅田 成一
松家 久美
朝比奈 伸一
是枝 龍哉
古田 幸司
内田 和人
川辺 幸一
宮城 明治
麻生 邦仁子
加藤 博
加藤 康洋
小澤 みどり
佐藤 典明
古瀬 武彦
以上 98 名

本部キャリアサポート課

公開シンポジウム「大学教育と職業との接続を考える」開催

一般

11月22日（月）、安田講堂にて日本学術会議、朝日新聞社、本学の主催により、シンポジウム「大学教育と職業との接続を考える」が開催された。これは、7月に日本学術会議が報告書「大学教育の分野別質保証の在り方について」をとりまとめ、その中で「大学と職業との接続」をめぐる問題について提言を行っていることを踏まえ、大学関係者と企業関係者等とが共に望ましい在り方を考え、情報発信をしていこうとするものである。

今回はその第1回目で、「大学生の就職をめぐる諸問題と当面の打開策」と題して行われた。大卒者の就職をめぐるのは、現在の経済情勢のもと、極めて厳しい状況となっており、学生生活や大学教育に重大な影響を及ぼしつつある。早期化・長期化する企業の採用活動の在り方は、日本の将来の人材育成にとって様々な隘路ともなっており、看過できるものではない、との関係者

の強い思いから実現したものである。後援には、文部科学省、厚生労働省、経済産業省をはじめとして、大学関係や経済界等の各界を代表する10の団体が参加しており、「このままではいけない」という、各界の関係者に共通の問題意識があることが浮き彫りとなっている。

開会にあたり、本学小島憲道 理事（副学長）および北原和夫 国際基督教大学教養学部教授（日本学術会議大学教育の分野別質保証の在り方検討委員会委員長）の挨拶の後、前半は、高祖敏明 上智学院理事長（同委員会副委員長）による基調講演が行われ、続いて経済評論家の勝間和代氏、寺田学 内閣総理大臣補佐官の講演が行われた。後半は、勝間氏、出井伸之 クオインタムリープ代表取締役をはじめ、牧原晋 日本電気株式会社人事部長、児美川孝一郎 法政大学教授、大橋秀雄 工学院大学院理事長、寺岡秀氏（首都大学東京学生）、NPO 法人POSSEの6名のメンバーによるパネルディスカッションが行われ、熱心な議論が交わされた。大学関係者のほか、経済界、企業等の幅広い分野から約700名の参加があり、参加者は皆熱心に聴き入り、この問題に対する関心の高さがうかがえた。

第2回シンポジウム「大学教育と産業社会の関係について考える」は同じく安田講堂にて12月20日（月）に開催される。



開会の挨拶をする小島憲道理事（副学長）



基調講演の高祖敏明上智学院理事長



熱心に議論するパネリストたち。左端はコーディネーターの本田由紀本学大学院教育学研究科教授と山上浩二郎朝日新聞社編集委員

本部入試課

入試事務室の設置



平成 23 年度入学者選抜実施に関する事務を処理するため、1 月 1 日（土）から 3 月 31 日（木）までの間、入試実施委員会のもとに、入試事務室が設置されることとなった。

入試事務室は、教育・学生支援部入試課長を室長に、室長代理、室長補佐及び室員若干名をもって構成される。

室員は、入試課職員のほか、本部各課等から派遣される事務職員で、およそ 3 か月にわたり、入学試験に関する業務にあたる。

本部入試課

平成 23 年度大学入試センター試験の 本学割当数決まる



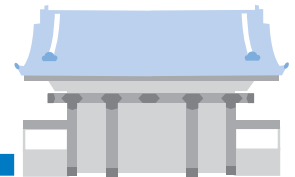
平成 23 年度大学入試センター試験の東京地区での割当数が、78,529 人に決まり、このうち本学が分担する志願者数は 11,474 人に確定した。

なお、平成 23 年度は、本郷試験場・教養学部試験場及び教育学部附属中等教育学校試験場の他、都立高等学校 1 校・私立高等学校 3 校の計 4 校を借用して実施することになった。

各試験場ごとの割当数及び担当学部は、次のとおりである。

試験場名		志願者数	担当学部
1 東京大学本郷試験場	法学部	1,045	法学部
	経済学部	540	経済学部
	工学部	1,290	工学部
	薬学部	102	薬学部
	その他	3	
	小計	2,980	
2 東京大学教養学部試験場		3,249	教養学部
3 東京大学教育学部附属中等教育学校試験場		870	教育学部
4 私立富士見丘高等学校試験場		1,120	医学部
5 私立海城高等学校試験場		1,215	文学部
6 都立日比谷高等学校試験場		960	理学部
7 私立開成高等学校試験場		1,080	農学部
合計		11,474	

部局 ニュース



大学院農学生命科学研究科・農学部



附属生態調和農学機構・自衛消防訓練を実施

10 月 19 日（火）13 時から約 1 時間半にわたり、本研究科附属生態調和農学機構において、自衛消防訓練を実施した。旧農場地区と演習林田無試験地地区を含む西東京フィールド全体から、生態調和農学機構とアジア生物資源環境研究センターの教職員・学生、農場博物館ボランティアの計 57 名が参加し、西東京消防署西原出張所の指導を受けて実施した。

研究棟本館 1 階から火災が発生したという想定で、初期消火に係る火災報知器の発報や消防署への通報等の後、建物内に逃げ遅れた者がいないかを確認しながら集合場所の中庭へ避難した。また、避難後には人員確認を行う等、実際に想定した訓練を行った。

その後、中庭において、消防署からの詳細な説明の後、粉末消火器を実際に使用した消火訓練を行った。オイルパンの中で燃え上がる炎を瞬く間に消火できる消火器から広がる粉末の多さに感嘆し、取り扱いを知ることの大切さを実感した。

次に、出血時や骨折時における三角巾を使っでの救急救命講習を受けた。生態調和農学機構は野外での作業が多いため大変意義のある講習であった。

西東京消防署より講評をいただいた後、起震車と煙体験ハウスで災害時のシミュレーションを体験した。

最後に小林和彦機構長から本日の訓練参加への謝意が述べられ、西東京フィールド内の教職員・学生・ボランティアのほとんどが参加した自衛消防訓練は無事、終了した。



中庭で粉末消火器を使っでの消火訓練



消防署による出血時の三角巾の使い方を見守る参加者



起震車で震度7を体感する

大気海洋研究所
 掘場国際コンファレンス「西部太平洋
 域における海洋科学研究の新しい展
 開」開催される

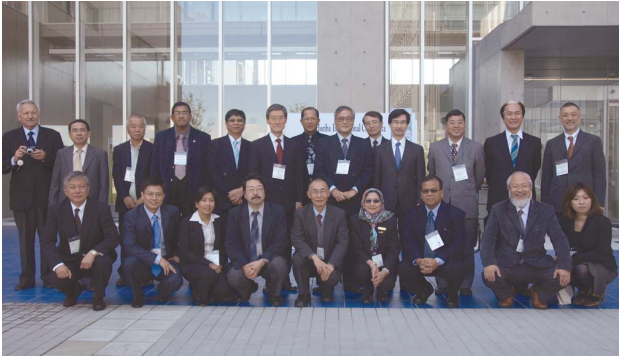
10月26日（火）から29日（金）にかけて、「Horiba International Conference “New Direction of Ocean Research in the Western Pacific” -Past, Present and Future of UNESCO/IOC/WESTPAC Activity for 50 years and the JSPS Project “Coastal Marine Science”-」が開催された。

本年は、旧海洋研究所時代より10年間にわたり東南アジア5カ国（インドネシア、タイ、フィリピン、マレーシア、ベトナム）の研究者、及び国内の協力研究者と実施してきた国際共同研究プロジェクト、日本学術振興会拠点大学交流事業「沿岸海洋学」の最終年度に当たり、また、UNESCO／IOC 50周年の年でもある。これを契機に掘場製作所が支援する東京大学掘場国際会議の1つとして、文部科学省、日本学術振興会、日本海洋学会、東京大学海洋アライアンス、海洋研究開発機構から後援をいただいて開催した。

本会議は「沿岸海洋学」のメンバーのみならず、UNESCO/IOC Sang-Kyung BYUN 副議長や、同WESTPAC Wenxi ZHU 事務局長など多くの関係者をお迎え、これまで「沿岸海洋学」が産み出してきた研究成果を取り纏めるとともに、同プロジェクトを終了した後、参加各国がどのように連携を維持して更なる発展を図っていくのか、各国の研究費獲得の状況等を踏まえつつ、パネルディスカッション・ポスターセッション等を通じて100名を越す参加者による活発な議論が行われた。本会議の最後に、「沿岸海洋学」につながるわが国からの新たな国際共同プロジェクトの提案がされ、その実現に向け取り組むことが支持された。



浅井孝司文部科学省大臣官房国際課国際協力政策室長の挨拶



IOE 関係の来賓と JSPS (日本学術振興会) リーダーの集合写真



参加者の集合写真

分子細胞生物学研究所

「動物慰霊祭」行われる

10月26日(火)10時より、第13回「東京大学分子細胞生物学研究所実験動物慰霊祭」が農学生命科学研究科附属動物医療センター奥の動物慰霊碑前において執り行われた。本年は秋雨が例年より長引き、足下が悪い状況にもかかわらず、昨年より多い106名の参列者があった。慰霊祭は、多羽田哲也副所長の挨拶、武山健一動物実験委員長から一年間の動物実験概要の報告に続いて、参列者による一分間の黙祷および焼香がしめやかに行われた。

分生研では所内実験動物施設でマウスやウサギ等をはじめとした実験動物が飼育・解析されており、主として、マウスは遺伝子改変マウス作製及びその解析、ウサギは抗体作製などに用いられている。研究内容には、骨・脂質・内分泌代謝に関する研究、癌化の分子機構に関する研究、肝臓の発生・再生・疾患に関する研究、哺乳類細胞の運命制御の解析、細胞骨格・細胞膜の形態制御に関する研究、減数分裂に関する研究、活性化型 mTOR の影響に関する研究など、幅広い生命現象の探究が7研究分野で実施されてきた。

近年、生命現象を分子レベルで証明するために、低分子化合物、遺伝子、タンパク質、細胞、個体へと一つの現象を様々な視点で検証することが問われている。特に遺伝要因を的確に捉える動物解析は、研究の信頼性を再現するだけでなく、既知概念との整合性との間で新たな発見が導かれる事が多く、極めて有用なツールとなっ

ている。さらに組織特異的に標的分子の機能解析も可能となり、実験動物の需要は益々大きくなりつつある。実際、これらの研究手法は世界水準として、我々が欧米諸国と同等やそれ以上の研究成果を示すには必須である。一方でこれらの実験動物の失われた尊い命を、有意義な研究成果にかえられるよう、個々の意識を高めることも忘れてはならない。

分生研では毎年、動物実験従事者に対する再教育訓練を行っているが、この慰霊祭においても、研究目的・意義が明確で、科学的手法により再現性・普遍性のある結果を導くために、必要最小限の動物を用いて、最大限の研究成果とその質の向上が得られるよう心がけることや、本学「研究機関等における動物実験等の実施に関する基本指針」の法令遵守の徹底を周知した。

最後に、分生研の研究活動のために尊い命を捧げてくれた実験動物たちの御霊に、感謝と追悼の意をここに表します。



焼香する参列者たち

大学院人文社会系研究科・文学部

イラン大使館より、イスラム学研究室へ蔵書寄贈

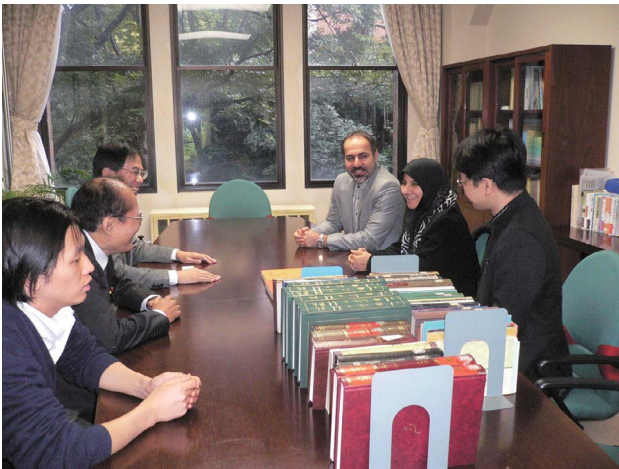
10月28日(木)、イラン大使館より146冊のペルシャ語、英語の貴重な蔵書が本学イスラム学研究室に寄贈された。

寄贈に際しイラン大使館より、マンスーレ・シャリフィ公使とハミッドレザ・マダッド参事官が来訪、小松久男人文社会系研究科長、竹下政孝イスラム学研究室主任教授、学生らが出迎えた。

小松研究科長より寄贈に対する謝辞とともに本学におけるイスラム研究、中東研究の動向と成果についての説明がなされた。シャリフィ公使からは、政治経済領域のみならず学術文化における日イラン関係のさらなる発展と貢献を本学に期待するというご挨拶があった。

公使は、日本での正しいイスラムの知識の啓蒙と、日本におけるムスリムの生活の支援がイスラム研究者の責務であると述べるとともに、若い世代の研究者に対

する積極的支援の用意があることを明言された。今回の寄贈もそのひとつの試みといえ、今後の日本とイランの学術交流、日本におけるイスラーム研究への大いなる関心と期待が感じられた。



小松研究科長、竹下教授とイラン シャリフィ公使



寄贈図書の前に

大気海洋研究所

大気海洋研究所OB会開催される

大気海洋研究所の柏キャンパス新研究棟の披露を兼ねたOB会が11月2日（火）、当研究所において開催された。懇親会に先立って行われた研究所・新研究棟概要説明会には約50名が参加し、海洋研究所と気候システム研究センターが統合して新たな研究教育拠点として大気海洋研究所がスタートした経緯や展望についての西田陸所長の説明に熱心に聞き入っていた。



西田所長による研究所・新研究棟概要説明

研究所の施設見学会では西田所長が自ら案内を行い、参加者は広報室作成の施設見学案内図を手に、新研究棟や観測機器棟を見学し、それらの機能性の高さに感心していた。

懇親会では、新野宏副所長の開会の挨拶、西田陸所長の挨拶の後、清水潮元教授の発声で乾杯が行われ歓談に入った。歓談では、現職の教職員、教職員OB、学生OBら約180名が50年の歩みを振り返るとともに、今後の発展に向けて抱負を語り合った。またOBの方々からのスピーチでは、現役時代の研究の取り組みや様々なエピソードが披露され爆笑を誘うとともに、研究所の今後のさらなる発展を期待しているとの声援が送られた。最後に本木昌秀副所長の閉会の挨拶があり、OB会は盛会のうちに終了した。



1階エントランスホールにおける懇親会

先端科学技術研究センター

第7回アジアがんフォーラム「アジアでがんを生き延びるーアジアのくらしと文化とがんと」開催

11月3日（水）、先端科学技術研究センターにて第7回アジアがんフォーラムが開催された。先端研・総合癌研究国際戦略推進講座・赤座英之研究室（www.siccn）

org) に拠点を置いて活動をしているアジアがんフォーラム (www.asiacancerforum.org 河原ノリエ主宰) は、これまで国内外の有識者による議論を重ねてきているが、第七回を迎えたこの日の午前、韓国・中国から研究者を招き、「人間の安全保障という観点から、アジアでどのような連携が可能なのか？」と題して医学系研究科国際保健学の渋谷健司教授や高齢社会総合研究機構の辻哲夫教授らとともにラウンドミーティングを行った。国際社会の疾病構造の変化の中、がんをグローバルヘルスアジェンダとして捉えることの意義について、包括的な知見と視点が得られた。

午後からは、文化の日にちなみ、「アジアでがんを生き延びる—アジアのくらしと文化とがんと」という一般向けのシンポジウムを開催した。これは、現代韓国研究センターとの共同プロジェクトの連携を期したのもでもあり、中野義昭先端科学技術研究センター所長が文理融合の学際的な研究プロジェクトの意義を挨拶で述べたあと、大学院情報学環附属現代韓国研究センター長である姜尚中教授が「いのちが結ぶアジアの連帯」と題し、記念講演を行った。次世代に引き継ぐ立場から、連携でワークショップを開催してきた京論壇の学生の発表もあった。パネルディスカッションでは「アジアの多様性」「民族誌的考察」などをキーワードに、情報学環の真鍋祐子教授や放送タレントの永六輔さんが日中の医療関係者、韓国の文化人類学者を交えてがんと文化について語り合った。アジアがんフォーラムとしては、この地域にいまだに横たわる、グローバリズムとナショナリズムの「ねじれ」の問題を、「がん」というアジアの重い共有課題の解決を通して超克できるのではないかと期待している。

食生活やくらし、疾病観の違いなど文化的な差異との関係を、丁寧に読み解いていく学際研究をアジアでともに進めていくことについて確認したところで、盛況のうちにフォーラムの幕がおりた。



歴史的負債を乗り越えるアジアの連帯



グローバルヘルスアジェンダへの白熱した討議



パネルディスカッション「がんと文化」

大学院医学系研究科・医学部
医学部解剖体慰霊祭が行われる

11月5日(金)14時から、台東区谷中の天王寺において平成22年度医学部解剖体慰霊祭(解剖体数102柱)が、ご遺族約170名、医学部関係教職員約40名及びこの春教養学部より進学し、初めて解剖実習に臨んだ医学科3年の学生など約110名の合計約320名参列のもとに執り行われた。

本慰霊祭は、ご遺体を医学教育と医学の進歩発展のために捧げられた方々の御霊に感謝し、お慰めするため、ご遺族をはじめご縁故深い方々のご臨席を得て毎年実施されているものである。

住職以下7名の僧侶による読経が境内に流れた後、清水学部長による祭文の朗読、焼香が行われ、ご遺族代表、教職員総代、来賓代表の焼香と続いた。学生代表として、医学科3年の水野雄太さんの焼香に続き、参列者全員が焼香を行った。

本堂における行事を終えた後、千人塚において僧侶による読経が行われ、隣接する医学部納骨堂での焼香を行い散会した。



解剖体慰霊祭にて祭文を朗読する清水医学部長

教育・学生支援部、大学院人文社会系研究科・文学部、大学院教育学研究科・教育学部、大学院理学系研究科・理学部

部局 進路セミナー「『学校の先生』という仕事」開催

将来の進路として教職に興味を持っている学生を対象として、進路セミナーを11月5日（金）に小柴ホールにて開催した。

山形俊男大学院理学系研究科長・理学部長の挨拶の後、本学卒業生である都立高の教諭2名、校長1名、教育学部附属中等教育学校教諭1名が、それぞれの経歴や教員を志した理由、また現在教員としてどのような日々を送り、何を感じているかなど具体的な経験をまじえながら「学校の先生」という仕事の魅力について講演した。

現職の「学校の先生」が語ることばに、真剣なまなざしで聞き入る学生たちの姿が多く見られた。質疑応答では熱心な質問が相次ぎ、講演した先生その他、当日ご協力いただいた都立高の校長数名もそれに答え、会場内は最後まで熱気に満ちていた。

セミナー終了後、会場前に場所を移して設けた懇親の場では、打ち解けた空気の中で、学生たちが先生を囲み、さらに具体的なアドバイスを受けるなど、盛会のうちに終了した。

来年度も引き続き、同セミナーを開催する予定である。



会場の様子



セミナー後の懇談会

大学院農学生命科学研究科・農学部

部局 附属牧場で「牧場公開デー」開催される

問題1：口蹄疫（コウテイエキ）という病気ですが、次のうち症状でないものはどれかな。

〈答え〉 ①発熱する ②元気がなくなる ③口等に水ぶくれができる ④マヒや起立不能になる ⑤多量のよだれがでる

問題2：口蹄疫はウシ等にかかる病気ですが、次のうち口蹄疫にかからない動物はどれかな。

〈答え〉 ①ウマ ②ヤギ ③ブタ ④ヒツジ ⑤イノシシ

上記は、牧場クイズラリーで出題した問題の一部である。4月に宮崎県で発症した口蹄疫の影響もあり開催が危ぶまれたが、昨年に引き続き笠間市農政課職員のご協力をいただき、11月6日（土）に牧場公開デーを開催した。笠間市の共催を得て今年で4回目（通算は6回目）となるが、地元住民の関心が非常に高く、多くの来場者で賑わった。当日午後には、眞鍋昇教授による「口蹄疫を防ぐ対策」と題した講演が行われ、笠間市の職員らが出席するなど関心の高さが感じられた。

笠間市からは、地元産のサツマイモ・ジャガイモの焼き芋、コシヒカリ米のおにぎり、カブの漬物とそのスー

ブ、笠間市が全国有数の産地である栗を茹でた試食コーナーや子ども向けにスナックゴルフなどの出展があった。

牧場側では、冒頭に記したクイズラリーや講演以外に、落書き用にハーレージ（牧草をラップで巻いたもの）を用意したり、仔ヤギとのふれあい広場、搾りたてミルクの試飲コーナー、ぬり絵大会や乗馬体験など多彩なイベントを企画した。



ふれあい広場の仔ヤギと戯れる子供たち



ぬり絵大会で塩田邦郎牧場長から表彰を受ける小学生

牧場での口蹄疫対策の取組としては、これまで見学の見合わせや、正面入口に消毒帯を設け車両や歩行者に対する消毒の徹底を行ってきた。更に、消毒ポイントとして各畜舎入口に消毒槽を設け、発生の防御に努めている。しかし、何よりも重要なことは、日々の家畜の健康管理であり、獣医師2名を含め、技術職員らが日夜飼養管理に勤しんでいる。

（問題の解答は、1が④、2が①です。）

大学院工学系研究科・工学部



核燃料物質・試験研究炉等安全管理
功労者表彰で文部科学大臣賞を受賞

2010年度の「原子力・放射線安全管理功労表彰」の核燃料物質・試験研究炉等安全管理功労者部門で、大学院工学系研究科原子力専攻で原子炉管理部長を務める齊藤勲助手が選ばれ、11月8日（月）、東海大学校友会館において文部科学大臣賞の授賞式が行われた。

「原子力・放射線安全管理功労表彰」は、（財）原子力安全技術センター、（財）日本分析センター、（社）日本アイソトープ協会及び（財）核物質管理センターが主催し、放射線障害防止中央協議会の協賛、文部科学省の後援を得て、原子力・放射線安全管理功労表彰委員会を設置し、実施するもので、「原子力・放射線安全に尽力して優れた成果を挙げた個人又は団体等を表彰することにより、関係者の更なる意欲の向上と原子力の安全確保及び核物質管理に対する国民の理解の増進に資すること」を目的としており、受賞者には文部科学省から文部科学大臣賞が贈られる。

齊藤氏の業績として、「東京大学原子炉「弥生」の運転維持管理、放射線管理の業務に多年に亘り従事し、同原子炉を安全に運転することに貢献した。さらに、こうした業務を通して、多くの学生、大学院生の原子炉及び放射線に関する安全教育、指導に尽力した」ことがあげられている。

この度の受賞は齊藤氏の永年のご功労が認められたもので、たいへん喜ばしいことである。さらに、本学にとっても名誉であり、大きな励ましとなるものである。今後とも一層のご活躍を期待したい。



表彰を受ける齊藤氏



受賞した齊藤氏（左）と上坂充原子力専攻長

大学院教育学研究科・教育学部

部局

『愛の労働あるいは依存とケアの正義論』をめぐる
—バリアフリー教育開発研究センターと「ちから研」
共催 ラウンドテーブル開催される—

11月12日（金）教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センターと今井康雄教授が代表となっている「教育における『力』の概念の学際的研究」（以下「ちから研」と略称）グループとの共催により、エヴァ・キテイ著『愛の労働あるいは依存とケアの正義論』をめぐるラウンドテーブルが開催された。この催しでは、ニューヨーク州立大学のエヴァ・キテイ教授を招き、同書の監訳者とバリアフリー教育開発研究センターの運営委員及び「ちから研」関係者を含めた約60名の参加者で活発な議論が行われた。

まず、司会の川本隆史教授から「依存」や「つながり」をベースにした平等論の構築という同書のモチーフの重要性について総括的な整理がなされた後、監訳者の牟田和恵大阪大学教授からはフェミニズムの歴史的展開における同書の位置付けに着目して、また同じく監訳者の岡野八代同志社大学教授からは公共空間において働く排除の力学への焦点化に着目して、同書への評価がなされた。

次に、白石さやバリアフリー教育開発研究センター長から現代社会で失われつつある共同体内のケア関係を再構築する必要性について、更に山根純佳山形大学講師からケアの受け手（子ども・高齢者・障害者等）の利害の脆弱性に注意を喚起する観点から、それぞれコメントがあった。

その後の質疑応答では、「ケアしない（ケアを強制されない）権利」の意義、社会的なサポート体制の必要性とその哲学的根拠、「自立／依存」という語に含まれる価値的含意等に関して、キテイ教授を交えて活発な意見交換が行われ、ラウンドテーブルは盛会のうちに閉会した。

バリアフリー教育開発研究センターでは、今後も「障碍（バリア）」について掘り下げた研究を行い、来年2月19日には、福武ホールにて当センター主催で第一回国際シンポジウムを開催する予定である。

（バリアフリー教育開発研究センターのサイト：
<http://www.p.u-tokyo.ac.jp/cbfe/>）

医科学研究所

部局

医科学研究所で動物慰霊祭行われる

11月11日（木）11時から、医科学研究所動物慰霊碑前において、動物慰霊祭が執り行われた。医科学研究所では、数多くの動物が研究・実験に供され、医科学研究所の発展に大きく寄与している。

当日は、清木元治所長の挨拶、甲斐知恵子実験動物研究施設長の報告があり、引き続き参列者が動物の霊に思いをいたし、献花を行った。動物を利用した研究に従事する研究者を中心に約350名の教職員等が参列し、滞りなく終了した。



慰霊のことを述べる清木所長



献花する清木所長（中）、甲斐施設長（左）



エヴァ・キテイ教授



ラウンドテーブルの様子

史料編纂所
第35回史料展覧会を開催

11月12日(金)・13日(土)の両日、史料編纂所では史料展覧会を開催した。前回の展示会開催は2005年11月で、今回の展示は5年ぶりとなるものであった。前回開催ののち、史料編纂所は、書庫をふくめた別館の耐震補強工事を経験し、その間には、国宝や重要文化財の貴重史料をふくむ原本の史料を、九州国立博物館にお預りいただいていた。今回、これら史料原本の復帰を機に、ホームカミングデーの期日にも合わせて史料展覧会を開催する運びとなった。展観のスペースは2階216号室。

展示の内容構成は次のとおりである。①鳥津家文書(国宝)、②江戸大地震図巻(国宝)、③溝口家史料(越後新発田藩主家)、④慶長遣欧使節関係史料、⑤長崎乙名本山家史料(寄託)、⑥黒船来航関係史料、⑦近江国愛智庄立券文、⑧拾芥抄(重要文化財)、⑨洞院公賢奏事目録、⑩小笠原文書、⑪久芳文書・佐藤文書、⑫愚昧記(重要文化財)、⑬石清水八幡宮歴代社務影紙形、⑭倭寇図巻、および、史料編纂所史関係史料(参考展示)である。こ

のうち⑦から⑩までは、本研究所編の近刊『東京大学史料編纂所影印叢書』(2007～09年、八木書店)に収録されている原本史料を展示した。また⑫は、本学経費等により近年修復が成った重文史料として、展示に供したものである。

また、今回の展示で特筆すべきものとしては、最近急速に研究が進展した「倭寇図巻」(⑭)がある。従来は16世紀の倭寇事件を描いた唯一の画像史料として知られ、日本史教科書に掲載されるなど有名な絵巻であるが、近年中国にも同様のモチーフを描いた絵巻が存在することが判明し、史料編纂所では両者の比較研究を目的として、12日(金)に国際研究集会を開催した(別掲ニュース参照)。中国国家博物館(北京市)所蔵の「抗倭図巻」が、その比較研究の対象であり、展示会場では、「倭寇図巻」と「抗倭図巻」それぞれの写真パネルを掲げるとともに、後者のレプリカをも展示した。また史料編纂所では、今回この「抗倭図巻」複製を寄贈いただいた、国家博物館副館長の陳履生氏ら一行を、この機会にあわせ招聘した。

展覧会初日の12日11時には、本学の濱田総長が見学のため来所するとともに、陳履生副館長らと親しく面談した。さらに展示会場では、国家博物館所蔵「抗倭図巻」の内容について、濱田総長が陳副館長から直接の説明を受けた。

会期両日あわせての入場者数は920人ほどで、盛況であった。



総長、パネル写真の説明を陳副館長に受ける
(史料編纂所内の展示会場にて)

史料編纂所
絵巻「倭寇図巻」・「抗倭図巻」比較検討のため、国際研究集会を開催

11月12日(金)の14時より17時まで、史料編纂所は、同所附属の画像史料解析センターとの共催により、国際研究集会《比較研究：「抗倭図巻」と「倭寇図巻」》を、所内の大会議室にて開催した。三本の報告がなされ、久留島典子センター長の司会により、活発な質疑・意見交換がおこなわれた。参加人数は約100人。

史料編纂所に「倭寇図巻」と呼ばれる絵巻が所蔵されている。これは、16世紀半ばに中国沿海部を襲った倭

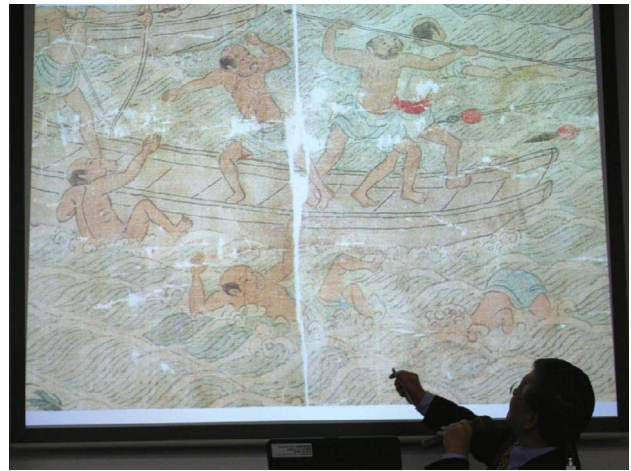
寇と明軍との合戦を描いたもので、倭寇を描いた他に類例をみない貴重な図像として、中学・高校用歴史教科書の多くにも掲載されるなど、従来広く知られてきたものである。近年、北京市の中心に所在する中国国家博物館に、「抗倭図巻」という絵巻が所蔵されていることがわかった。史料編纂所蔵「倭寇図巻」と非常によく似た画面構成をもち、図柄も類似していることから、両者は密接な関係を有するのではないかと想定された。史料編纂所では同館の理解と協力の下、覚書を締結して「倭寇図巻」・「抗倭図巻」のデジタル画像を交換し、国際共同研究のプロジェクトを企画した。その第一歩として、中国国家博物館より陳履生副館長ら一行を招聘し、二つの絵巻を学術的に比較検討することを目的として、研究集会を開催したものである。

まず第一報告として、史料編纂所より須田牧子助教が立ち、二つの絵巻についての基本的な事実関係や研究史を押さえた上で、新たな知見についての発表をおこなった。史料編纂所技術部の写真室スタッフにより行なわれた赤外線撮影により、「倭寇図巻」・「抗倭図巻」の両方から、肉眼で判読できない文字の存在が明らかとなった。この新たに発見された文字により、両絵巻の歴史的な性格を解明するための重要な手がかりが得られる、との論旨であった。

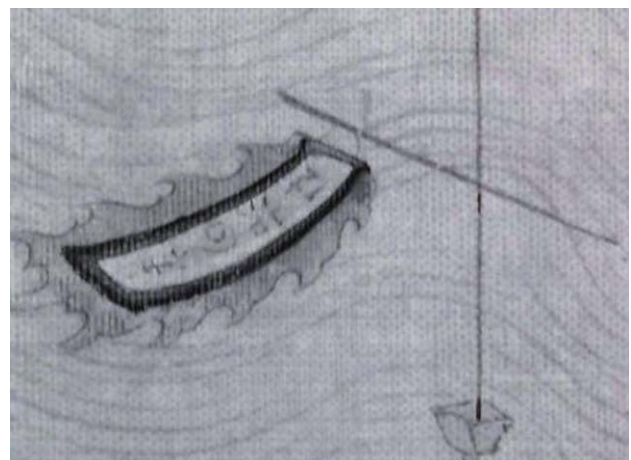
第二報告では、明代史を専攻する中国国家博物館の朱敏副研究館員により、「抗倭図巻」の図柄について詳細な分析が行なわれ、同史料が描いている具体的な事件、および描かれた背景について仮説が提示された。最後に陳履生副館長が報告に立ち、主として中国美術史上の見地から、周辺作品も紹介しつつ二つの絵巻を比較し、共通点や特色についての指摘をおこなった。従来中国美術史研究では、こうした作品は充分に取り上げられてこなかったが、「抗倭図巻」等のごとく、社会的機能を担った図像の研究が今後は必要となる、とも述べられた。これら三報告を通じ、「倭寇図巻」・「抗倭図巻」への理解は飛躍的に深まったといえよう。

今回の研究集会は、史料編纂所開催の史料展覧会（別掲ニュース参照）において、これら二つの「図巻」を展示する機会に合わせ、開催されたものである。国家博物館より史料編纂所に寄贈いただいた「抗倭図巻」の複製を、「倭寇図巻」とあわせ展示することができた。


今後、史料編纂所は、「日本史史料の研究資源化に関する研究拠点」として、共同研究計画を組織し、引き続き国際的な比較研究を継続・推進する予定である。



報告中の陳履生副館長（史料編纂所にて）



赤外線撮影による『倭寇図巻』（部分）、「弘治四年」の年記が読める

	生産技術研究所
	ツァヒャー・エルベグドルジ モンゴル 国大統領、安田講堂にて講演

11月16日（火）、ツァヒャー・エルベグドルジ モンゴル国大統領が本学を訪問され、本研究所主催の講演会として安田講堂において開催された。演題は「開発と自然環境」で、約30分間に渡り、モンゴル国の環境および資源開発に関して講演が行われた。

安田講堂の一階部分が満席となる約700名を超える参加者が集まり、耳目を傾けた。

モンゴル国は、遊牧民が自由に渡り歩く移動牧畜がよく知られ、その生活スタイルは、現在の地球環境の変化を著しく感じやすい。いまでは都市環境が整備され、その様式もだいぶ様変わりしたようである。人口が約250万人であるのに対し、家畜数が約3000万といった棲息個体割合なども特徴的で、草食家畜用のバイオ緑化整備も急務となっている。また、いま話題のレアアースなどの資源開発において、世界的に注目を集める国のひとつとなっている。合金鋼成分であるモリブデンや石炭の開発が推進されている。

今回、大統領の主な来日目的は、日本との「戦略的パートナーシップ」を締結すべく、日本政府との関係強化を望んでのものである。講演では、日本をロシア、中国に次ぐ第三の重要な隣国として位置づけ、積極的な投資と資源開発／鉱山探索の協調を呼びかけられた。講演中、「もう既に目覚ましのベルが鳴っている」といった独特の表現で、特に日本企業からのモンゴル国来訪を期待しているとのことであった。演題にもあるように開発と環境保全の両立を目指さねばならないと強調され、そのための日本からの協力、両国の戦略的互恵関係の構築を目指したいと語られた。

講演終了後、質疑応答が行われ「東京大学の学生との対話を楽しみにして来た」と仰られた通り、聴講学生からの質問に予定時間を過ぎてでも大統領自ら指名し質問をお受けになられていた。

質疑応答終了後、濱田純一総長より、記念品贈呈が行われ、盛会のうちに終了した。

モンゴル国と言えば、モンゴル相撲。引退した朝青龍関、そして大統領来日まで連続勝ち星の記録を打ち立てていた白鵬関など。それに青い空、広大な緑の大地である。地球規模で広がる環境問題に国境は無く、振り返り見れば地球上の資源には限りがあるが、生活の知恵を共有し自然を享受することに関して学ぶべきところの多い隣人の話には最後まで興味が尽きなかった。この場をお借りして、警備や事前準備に当たられた多くの事務職員の方々に御礼を申し上げたい。



講演を行うツァヒヤール・エルベグドルジ モンゴル国大統領



講演会会場の様子（安田講堂内）

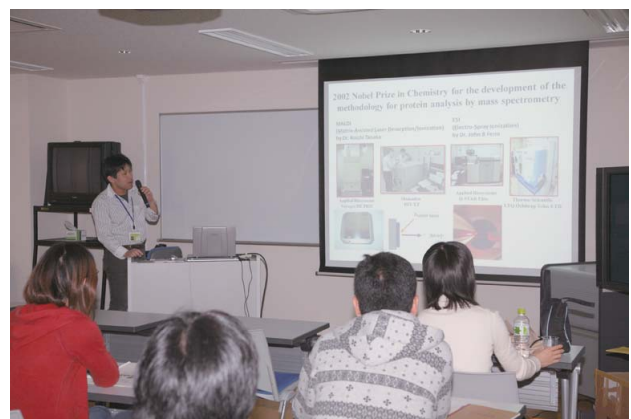
医科学研究所
技術職員研修（分子医科学関係）を開催

東京大学技術職員研修（分子医科学関係）が11月17日（水）～19日（金）に医科学研究所で行われた。この研修は、医学部と医科学研究所とで毎年交互に開催されているもので、技術職員の実行委員を中心にテーマの選定や研修の企画・運営が行われている。

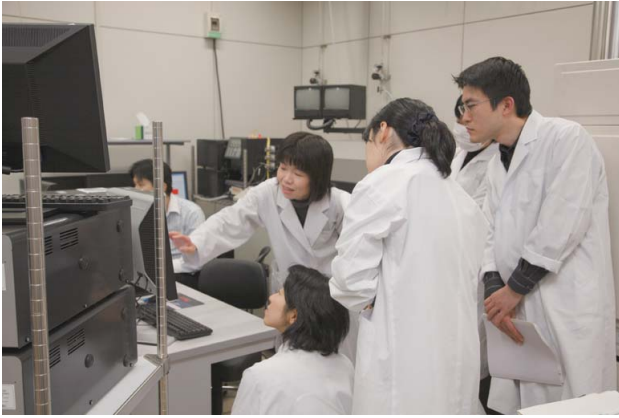
今年は「プロテオミクスから創薬へ向けた医科学研究」をテーマに、質量分析計を使用した実習と関連する5つの講義が提供された。

実習では、培養細胞からの質量分析サンプルの調製（タンパク質試料の還元アルキル化、酵素消化）から始め、次世代型質量分析計で高速ショットガン解析を行い、翌日解析ソフトを利用してリン酸化タンパク質に関する翻訳後修飾部位を網羅的に同定するという手法を、研修参加者が実際に手を動かして体験した。

また、「プロテオミクスが解き明かす生命システムの新たな全体像」、「疾患プロテオミクス研究の最前線」、「nanoLC/MSおよびnanoLC/MALDIシステムの紹介」、「質量分析装置を応用した先端プロテオミクスと応用例」、「医療展開を指向した蛋白質相互作用解析」と題する講義では、プロテオミクス解析の基礎から応用までが紹介された。講義は、技術職員研修受講者以外にも、質量分析計を実際にも使用している、もしくはこれから使おうと計画している技術職員をはじめ、ポスドク、大学院学生、技術補佐員等からも多数の聴講があり、質疑応答も活発に行われた。参加者からは、「質量分析計を用いた研究の実例や、これからの可能性について紹介していただけだったので、大変勉強になった。」などの意見が寄せられた。



尾山大明特任助教（現・准教授）による講義



質量分析計を使用した実習



集合写真



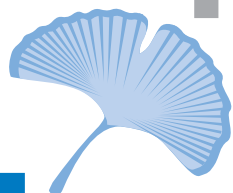
完成したガイダンスブックの表紙と学生メンバー

大学院農学生命科学研究科・農学部

学生による農学部ガイダンスブックが完成

農学部では、学生有志が主体となって農学部の活動を紹介する冊子「学生による農学部ガイダンスブック」を不定期に作成しており、今回その3回目となるガイダンスブックが完成した。読者対象は進学振分けを控えた教養学部1・2年生がメインであるが、高校生や一般の方にも楽しんでもらえる内容となっている。農学の魅力を伝え、多くの人に農学部に関心を持ってもらえるように、構想から原稿作成・レイアウトまで学生主体で作りあげた。教員や事務で作成した硬い文言が並ぶオフィシャル本ではなく、学生目線で自分の専修（学科）を紹介するところが、この本のポイントである。今回は内容を全面的にリニューアルし、学生が気合いを入れて作成した。農学部というと「農業」というイメージにとらわれがちであるが、実際に農学部が扱うテーマは非常に幅広く、環境、食糧、バイオマス、生物多様性、微生物、食の安全といった昨今話題のトピックは、まさに農学部のメインフィールドである。本書により多くの人に農学の魅力が伝わることを願っている。

キャンパス ニュース



キャンパス

本部学務課

平成 22 年 11 月 1 日現在学生数

—学部学生 14,112 人、大学院学生 13,833 人、研究生等 945 人—

本学では、毎年5月と11月の年2回、同月1日現在の学生数を調査し「学内広報」に掲載している。本年11月1日現在の学生数は次のとおりである。
なお、標題の「研究生等」とは学部研究生、学部聴講生、大学院外国人研究生、大学院研究生、大学院特別研究学生及び大学院科目等履修生の合計である。

平成 22 年 11 月 1 日現在 学部学生・研究生・聴講生数調

種別	在籍者												在籍者のうち、 外国人学生及び休学者 (再掲)						研 究 生			研究生のうち 外国人 (再 掲)			聴 講 生						
	入進学 年度別		平成 22 年度		平成 21 年度		平成 20 年度 (以前)		平成 19 年度		平成 18 年度 以前		小 計		合 計		外国人学生		休 学 者		研 究 生			研 究 生 の うち 外国人 (再 掲)			聴 講 生				
	学部・課程別	性別	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計		
前期課程・教養学部		2,549	605	2,550	589	242	29					5,341	1,223	6,564	112	59	171	20	8	28			—			—			—		
後期課程	法学部		344	82	327	95	159	35				830	212	1,042	16	7	23	19	3	22			—			—	12	2	14		
	医	医学科		84	16	85	17	85	15	79	18	17	0	350	66	416	6	0	6	9	2	11	24	11	35	1	0	1			—
		健康総合科学科		9	14	11	5	0	4					20	23	43	0	1	1	0	0	0									
	工学部		903	101	901	83	155	7					1,959	191	2,150	63	17	80	38	4	42	18	9	27	11	7	18	12	2	14	
	文学部		260	102	251	123	129	58					640	283	923	10	4	14	26	10	36	0	3	3	0	0	0			—	
	理学部		275	35	272	31	51	1					598	67	665	14	5	19	10	0	10	3	0	3	0	0	0	3	0	3	
	農学部		193	56	187	48	39	2					419	106	525	10	3	13	6	1	7	4	1	5	2	1	3	0	0	0	
			17	15	17	16	18	16	20	11	4	1	76	59	135	1	1	2	2	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0		—
	経済学部		297	54	299	54	76	16					672	124	796	14	11	25	15	2	17			—		—	2	0	2		
	教養学部		108	60	121	57	53	29					282	146	428	9	4	13	6	7	13	4	5	9	0	0	0	11	17	28	
教育学部		56	45	61	44	25	8					142	97	239	2	2	4	3	2	5	4	2	6	0	0	0			—		
薬学部		69	23	56	23	0	0					125	46	171	8	4	12	1	0	1	3	0	3	0	0	0	0	0	0		
				6	2	5	2					11	4	15	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	小計	2,615	603	2,594	598	795	193	99	29	21	1	6,124	1,424	7,548	153	59	212	135	32	167	60	31	91	14	8	22	40	21	61		
	合計	5,164	1,208	5,144	1,187	1,037	222	99	29	21	1	11,465	2,647	14,112	265	118	383	155	40	195	60	31	91	14	8	22	40	21	61		

- 備考) 1. 農学部の上段は獣医学課程を除く各課程の合計数を、下段は獣医学課程の数を示す。
2. 薬学部の上段は薬学科(6年制)を除く各課程の合計数を、下段は薬学科(6年制)の数を示す。
3. 平成20年度(以前)の欄については、医学部医学科・農学部獣医学課程・薬学科(6年制)は平成20年度入進学者のみ、他の学部学科は平成20年度以前の入進学者数を示す。

中華料理の美

東京大学日本・アジアに関する教育研究ネットワーク(ASNET)ではアジアに関する様々な研究、教育活動に従事しています。東京大学AGS、東京大学地球持続戦略研究イニシアティブ(TIGS)との共催の「アジアの食文化とグローバル化」もその一つです。今回は2010年10月20日に開催されました、菅豊氏(東洋文化研究所、教授)による、「中華料理の美」をご紹介します。

皆様もよくご存じの通り、中華料理には四川料理、広東料理など、大きく分けて8つの料理があります。しかし、豊富な食材(選料)と調味料(調料)を用い、多様な加工(刀工)と火による加工(火候)を通じて、食材と物理的・化学的・生物学的な加工を施すことのみならず、料理と食の芸術と科学的な加工の意匠の上で幸福を象徴するものとして、理に共通する特色だそうなんです。たとえば、中卵とハムによって鶏の形に模らした冷菜は、「鶏」の漢字の音(諧音)の「吉」を意味し、類感想起される「吉=幸福」を食することによって実現するそうです。また中国では長寿の願いが込められている桃に詰められた料理には、そのような意味を味わうためには、料理にまつわる潜在的な意味を心得る教養が必要であり、そのような教養をもとに食卓は人々の語り場へと変化していくのだそうです。ここに、中国の人々の、食材、料理、食への飽くなき好奇心を読み取ることができ、技術や認知を加えていくという志向性は、中華料理に限らず、中国の工芸や環境観、資源開発、土地利用、社会システムなどにも垣間見ることができそうです。

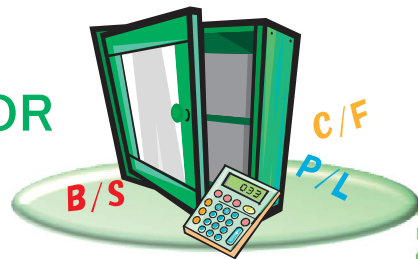
この研究会は、今後も様々なアジア料理を議題に開催していきます。日本・アジア学研究者データベース <http://www.asnet-u-tokyo.ac.jp/dbregistration> に登録して頂き、学内メーリングリストに登録して頂きますと、開催案内がお手元に届きます。ご活用下さい。



日本・アジアに関する教育研究ネットワーク (ASNET) 安田佳代

決算のDOOR

～数字が語る
東京大学



第3回 果たして鑑定やいかに？

弥生キャンパスの最北端に野球場があります。全面人工芝のグラウンドをぐるりと囲む観覧席とフェンス、実はこれ、登録ほやほやの有形文化財なのです。

鉄筋コンクリート造の階段状の観覧席、木製のベンチ、アーチ形の屋根(右下写真)が戦前(昭和12年)の建造物としては、大変斬新でモダンなデザインだと評価されました。

後日、文部科学省からとてもシンプルな登録証が届きましたが、それに伴い資産登録されている観覧席がそれまでの「構築物」という償却資産から、非償却資産の「美術品」になりました。「美術品」と聞くと、まず絵画や彫刻、工芸品などを思い浮かべがちですが、文化財として指定を受けた建造物も立派な「美術品」。創立133周年の東京大学ではそのほかにも赤門、安田講堂や法文1号館、農学部3号館など、日ごろ何気なく利用していても実は「美術品」である建造物がキャンパス内にゴロゴロしているのです。



さて、ここで問題。この「美術品」となった観覧席の資産額は、一体いくらになったでしょう？…答えはなんと1円！資産額の算出は、取得した時の金額または時価を用います。今回の観覧席は竣工から73年たち、すでに資産価値はゼロ。それなら「鑑定評価」という方法もあるのですが、大学は美術館でも古美術商でもありません。効率性、必要性から考えても不適當。このような場合、会計の世界で用いるのは、「備忘価額(びぼうかがく)」と呼ばれる金額で、これが1円。ただし、1円は1円でもお財布の中に入っている1円玉ではなく、会計上忘れず憶えておくための1円なので、貨幣価値はありません。ちなみに、現在東大の「美術品」は全部で749件、資産総額は約30億円と公表しています。ですが、この「30億円」、これまでのお話から甚だ曖昧な金額だということがわかりますよね。



もし、鑑定団の先生方に1件1件丁寧に鑑定していただいたら一体いくらになるか……
捕らぬ狸ではありませんが、ちょっぴりワクワクしませんか？(青)



美術品の数々(左上から赤門、法文1号館、安田講堂、農学部3号館)

このコラムへのご意見、ご質問をどしどしお寄せ下さい。お待ちしております！

本部財務部決算課

E-mail: kessan-g@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

※この連載では、政策ビジョン研究センターが現在最も重要視しているトピックスを中心に、そのときどきのホットニュースを、当センターの取り組みの様子、活動状況などと共にご紹介していきます。

ラオス、タイ訪問調査 エネルギー効率化の ロードマップを

本年7月の東アジア首脳会議エネルギー大臣会合において、東アジア諸国におけるエネルギー効率化ロードマップ (Energy Efficiency Roadmap) に向けた合意がなされました。これを受けて当センターは「国際機関 東アジア・ASEAN 経済研究センター」とともに、ラオス、タイを対象としたエネルギー効率化ロードマップ策定プロジェクトを開始します。その事前調査として本プロジェクトメンバーは11月、ラオス(ビエンチャン)、タイ(バンコク)に赴き、ラオス国エネルギー・鉱物省やタイ国エネルギー資源、内閣官房、環境、交通の関係部局や、当地で再生可能エネルギーの普及を進めるNGOを訪問し聞き取り調査を実施しました。ラオスでは鉱業、輸送業、観光業の成長が目覚ましい一方で、生活向上のためのエネルギー供給体制の整備が待たれています。



電線がスパゲティ状に絡まっていて、送電効率を落としている。

現時点では、エネルギー効率化についてのマスタープランや法律は存在しませんが、産業、輸送業はもとより、家庭におけるエネルギー等も対象として検討されています。

エネルギー供給については、都市部や主要地域では国の基幹エネルギーである大型水力を中心に、発電施設の増設で対応していますが、アルミニウム産業の動向により需要が大きく左右される点が課題となっています。国境付近の遠隔地については、主にタイからの電力輸出入で対応しているほか、ベトナムや中国ともグリッドは連結しており、近隣諸国とのエネルギーの相互依存は深まっています。住宅では薪に代わるものとして新型の調理用ストーブが開発・導入されつつあり、家庭の照明やエアコンにおける省エネルギー化も少しずつ進んでいます。再生可能エネルギーの導入についての補助金制度も設けられているようでした。

タイでは運輸セクターが最もエネルギー消費量が多いこともあり、関連技術のロードマップを描くことが重要と思われます。この前提として、とりわけ都市部においては、交通渋滞の解消や信号機の整備、乱雑な配線となっている市内の電線の合理化など、新たな都市計画の必要性があります。



ラオスの新エネルギー関連企業へヒアリング。水力発電が主要なエネルギー供給源となっている。

公共交通としてバスを本格的に普及拡大することが必須であり、高速バスによる輸送 (bus rapid transit) の導入なども検討されてよいと考えられます。この点は、東南アジアの都市部に共通する課題といえます。

ラオス、タイ両国とも今後は大きなエネルギー需要が見込まれます。これまで先進国がとってきたエネルギー政策も、両国のエネルギー政策形成の参考になりますが、再生可能エネルギーや新しいシステムによってバイパス出来る技術もたくさんあります。産業政策との相互影響を考慮に入れ、低炭素と経済成長を共に実現するエネルギー効率化ロードマップが必要不可欠です。

プロジェクトメンバーは今回の現地調査を受けて、今後さらに本格的な調査を実施します。エネルギー効率化の定義と目標設定の様式を明らかにしながら、どのような技術や制度が促進されるのか、当センターの研究成果を活かして幅広く経済的、社会的影響のアセスメントを行い、ロードマップの策定に貢献していきます。

研究会開催報告

科学技術と社会の 関係深化に向けて

当センター技術ガバナンス研究ユニットでは、科学技術の現場ではどのような社会的課題を抱えているのかを分野横断的に把握し、科学技術に関わる多様な社会的価値とそのガバナンスのあり方について包括的な知見と視点を得ることを目的とし、「科学技術ガバナンス研究会」を開催してまいりました。

本年4月から7月にかけての第一期は、研究会を計13回開催し、各分野で活躍されている自然科学系研究者から意見を伺うとともに、政策研究者との議論を行いました。7月3日には

鈴木寛文部科学省副大臣をお招きし、これまでの議論を総括する公開講演会を開催しました。講演会では、科学技術ガバナンスの課題として、意思決定のあり方とテクノロジーアセスメントの役割、日本の科学技術戦略の方向性、そしてシステム構築や人材育成が挙げられました。これを受けたディスカッションでは、制度論に偏重せず、文科省のサイト「熟議カケアイ」や各種データの積極的な公開を通じてシステムからプロセスへと着眼点を移していく必要性、市民側のインフォーマルな公共圏をオープンな公共圏と連動させる可能性などが議論されました。

来年2月までの第二期は、幹細胞研究やレアアースなど話題性の高い科学技術を取り上げ、専門家を招いてのヒアリングを継続しています。

これまでに開かれた研究会一覧

【第一期】

- ① 4/21 坂井 修一/情報理工学系研究科教授
- ② 4/23 中須賀 真一/工学系研究科教授
- ③ 5/11 五神 真/理学系研究科教授
- ④ 5/14 片岡 一則/工学系研究科教授
- ⑤ 5/18 渋谷 健司/医学系研究科教授
- ⑥ 5/21 下山 勲/情報理工学系研究科教授
- ⑦ 5/24 柳瀬 唯夫/経済産業省産業再生課課長
- ⑧ 5/25 豊島 聡/(独) 医薬品医療機器総合機構 シニアアドバイザー
- ⑨ 5/31 山地 憲治/(財) 地球環境産業技術研究機構 理事・研究所長
- ⑩ 6/7 唐木 英明/日本学会会議副会長
- ⑪ 6/10 薬師寺 泰蔵/(財) 世界平和研究所
- ⑫ 6/11 木村 貴文、青井 貴之、川上 雅弘/京都大学 iPS 細胞研究所
- ⑬ 7/3 鈴木 寛/文部科学省副大臣 ※公開講演会

【第二期】

- ⑭ 11/18 仙石 慎太郎/京都大学 iCeMS 准教授
- ⑮ 11/26 原田 幸明/物質・材料研究機構 元素戦略センター長

研究会の最新情報、参加方法はHPをご確認ください。

東京大学産学連携本部・日本
ベンチャー学会・スタンフォード
大学連携シンポジウム

企業文化を醸成、ベンチャー企業創出へ

「アントレプレナーシップ 企業家精神こそが日本を変える」開催

「起業家精神こそが日本を変える」をテーマにしたシンポジウムが東京・千代田区の一橋記念講堂で11月1日開催されました。本シンポジウムは、東京大学産学連携本部、日本ベンチャー学会、スタンフォード大学(STAJE)が主催し、日本経済新聞社が共催。冒頭の主催者開会挨拶で、東京大学産学連携本部の影山和郎本部長は「大学で生み出された研究成果を移転可能な形にして社会に還元することが重要な使命」と指摘し、「起業や大学発ベンチャーの支援が産学連携本部の大きな柱」と紹介しました。日本ベンチャー学会会長の伊藤邦雄氏(一橋大学大学院教授)は「今回のシンポジウムは“未来志向”であり、未来に向けての骨太のヒントを得たい」と挨拶。スタンフォード大学名誉教授のウィリアム・ミラー氏は、起業家精神醸成のための“ハビタット(ベンチャーを育む生息環境)”という概念を提起しました。

駐日米国大使ジョン・ルース氏は「起業家精神によるイノベーション：成長への鍵」と題する基調講演で、健全な経済の維持には起業家精神が重要であることを強調されました。大使は、起業家は称賛されるべきであると述べ、自身がシンポジウムに招待した神戸市在住の中学生の起業家精神溢れる活動を紹介しました。

基調講演に続き、アントレプレナーシップ醸成の要件として、「リスクマネー・VC機能要件とEXIT戦略」「起業家教育」という2つのテーマでパネルディスカッションを行いました。モデレーター及びパネリストとして、日本ベンチャー学会の伊藤邦雄会長、副会長の金井一頼氏(大阪大学大学院教授)、朝倉陽保氏(産業革新機構 専務COO)、村木徹太郎氏(TOKYO AIM取引所代表取締役社長)、ウィリアム・ミラー氏、ロバート・エバハート氏(スタンフォード大学フェロー、

STAJEリーダー)、アン・ミウラ・コー氏(Floodgate共同創業者)、郷治友孝氏(東京大学エッジキャピタル代表取締役社長)、石井正純氏(AZCA代表取締役社長)、各務茂夫教授(産学連携本部事業化推進部長)が参加し、活発な議論が展開されました。

閉会挨拶で産学連携本部の各務教授は、ベンチャー支援の現場からみた現在の状況を「夜明け前の段階。エネルギーは着実に蓄積されている」と表現し、起業家のロールモデル作りに邁進する考えを示しました。定員以上の約580名の聴衆が来場し、途中立ち見者が数多く出るほどで、最後まで熱気に満ちたシンポジウムは盛況裏に終了しました。



パネルディスカッション(左から)金井教授、ミウラ・コー氏、ミラー教授、伊藤教授、各務教授

Column 東大発ベンチャー企業におじゃましま〜す!

「IT化の流れの中で、逆に、紙の良さを活かさないかと考えました」——。手書き情報の自動入力・集計を可能にし、“次世代入力サービス”の異名を持つ「AltPaper(アルトペーパー)」を開発された(株)情報基盤開発の社長鎌田長明氏は、「東京大学アントレプレナー道場」(産学連携本部主催の学生育成教育プログラム)で起業精神を育まれた、道場OBでもいらっしゃいます。鎌田氏が東京大学工学系研究科社会基盤学専攻「橋梁研究室」に所属していた当時、鉄道会社との共同研究で開発された、橋梁の検査データを管理するシステムのプロトタイプの恒常化から会社を興されました。その中で課題となっていた、検査帳票の入力作業をOCRで効率化するシステムが、アンケートの集計などにも幅広く使える可能性を発見。「紙をITデバイスにする」、そんな強い思いから商品化に踏み切られました。

「誰もがITの恩恵を受けられるよう、オフィスにあるモノだけで使えるようにしたかったですね」(鎌田氏)。

その言葉通り、MS-Wordで作成した「紙アンケート」に手書きされた内容をコピー複合機などでスキャンすることにより、入力・集計にかかる作業時間をこれまでの40分の1までに短縮。同時にコストも削減可能に。これは同社の高度な画像処理技術によって実現されたことで、

紙の衰退を唱える声が多い中、従来の常識を変える、紙の新しい使い方を提案されたのです。今後はデバイスを増やし、海外進出も控える同社。「AltPaper」の更なる可能性を、強く頼もしく感じました。

株式会社情報基盤開発



代表取締役: 鎌田長明
本社: 東京大学本郷キャンパスアントレプレナープラザ3階
設立: 2004年8月 <http://www.altpaper.net>
事業内容: 「AltPaper」事業、データベースシステム事業



鎌田代表取締役(最前列左から2人目)と社員のみなさん。
「ITの力で解決できれば、世の中の役に立てる！」がモットーです

AltPaperで作成した紙アンケート。現在、300枚まで無料のキャンペーン実施中!

連絡先: 産学連携本部 (本部産学連携課)
電話: 内線22857 (外線03-5841-2857)
WEBサイト: <http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

DUCR

検索

DUCR
Division of University Corporate Relations
The University of Tokyo



第14回 ポスターを派手にしました。

メリークリスマス！今回の学内広報の発行はクリスマス直前ですが、この原稿を書いているのは今年度2回目の募集が終わった頃です。今回も沢山のご応募をいただき、その中から限られた台数を割り当てるのは難しい作業でしたが、無事選考を終え、現在引き渡しを済ませたところ。そんなふうで終了した今回の募集ですが、実はポスターを一新しました！

今までは、事業の概要が分かるようなポスターを作るように心がけていました。なぜなら、この「ノートPCリユース」という事業はほとんどだれも聞いたことのないものでしたから。

しかし！この事業も開始後早一年、応募延べ数は500を超え、もうそろそろ「リユースPC」という言葉を何回かは目にしたり耳にしてくれているのではないかとあれば、アピールすべきは「いま募集中だということ」なのでは？講義やセミナーなど学生生活に必須で興味ある情報満載の掲示板の中で、どうしたら学生さんの目を惹けるだろうか？ということを考えながらできた今回のポスター。要するに、とにかく派手に！ということを念頭に作りました。いかがでしょうか。このレインボーなポスターは、皆さまのお目にとまることができたでしょうか？

募集開始のポスターは学生さんだけでなく、PCを提供して下さる教職員の皆さまにも、ノートPCリユースオフィスの活動を伝える重要な手段です。ひとりでも多くの東大関係者にこの事業を知ってもらうことで、PCの回収→再生→貸出という「リユースのわ」を実現できれば、と願いつつ。2月の次回募集はどんなポスターにしようかな？と思いを巡らす日々であります。(戸)



☆11月各部署ご提供PC☆

工学部 15台 新領域創成科学研究科 7台 理学部 3台 教育学部 2台
保健センター 2台 教養学部 1台 空間情報科学研究センター 1台

以上31台のノートPCは5回目の募集時に利用させていただきます。どうもありがとうございました。引き続きよろしく願いいたします。

- 問い合わせ先：ノートPCリユースオフィス (本部資産管理部資産課内)
E-mail: pcreuse@adm.u-tokyo.ac.jp
URL : http://pcreuse.adm.u-tokyo.ac.jp/
内線: 22135 (担当 小川・高橋・戸田)
- ノートPC回収先：美津野商事株式会社システム事業部
E-mail: reuse@mizuno.net (担当 川崎・石井)
電話: 03-3943-0181 FAX: 03-3943-4180

インタープリターズ・バイブル vol. 41



科学技術インタープリター養成プログラム

挑戦的課題

佐倉統

情報学環 教授

教養学部附属教養教育高度化機構
科学技術インタープリター養成部門

科学技術インタープリター／コミュニケーターとは、何か？科学技術を一般の人たちにも分かりやすく伝える仕事、またその仕事をおこなう人たちである。なぜ科学技術にはコミュニケーター／インタープリターが必要なのだろうか？科学技術の内容が、一般の人たちに分かりにくいからである。では、なぜ科学技術は一般の人たちに分かりにくいのだろうか？

発生物理学者のルイス・ウォルパートや生態学者のロビン・ダンバーは、科学が知識を獲得する方法それ自体が人間の直観に反するからだとして述べている。たしかにそうだ。実験という手続は、さまざまな要因をコントロールして、いわば不自然な状態を人工的に作り出して、現象の原因やメカニズムを調べる方法である。実験条件下での現象そのものが、通常感覚ではなかなか理解しにくいものである。

ならば実験によらない直接観察や調査なら良いかといえば、そう単純ではない。これらの研究では統計学的手法を駆使して因果関係を推定する。これまた人間の直観に反することがしばしばだ。インチキなしのサイコロを振ってたまたま10回続けて6の目が出たとして、次の11回目に6が出る確率もやっぱり同じ6分の1というのは、なかなか納得のいくものではない。直観的には、次も6が出る確率は、限りなくゼロに近い。ぼくもつい先日、「モンティ・ホール問題」という、直観と確率が異なる問題を知って、愕然としたところだ(興味のある方は検索してみてください。とてもおもしろいパラドクスです)。

地球の年代も宇宙の年代も、科学が進むにつれて、どんどん長い方に修正されてきた。人間の推定は、いつも常に過小評価だったのである。宇宙科学というのは、それだけ人間の直観に合わない成果を出し続けてきたということだ。自然科学は、宇宙に限らず、人間が直観的に抱く自然像を常に描き直してきた。人間の知識空間を広げ続けてきたと言ってもいい。人間が直観的に世界を認識するイメージというのは、進化の過程で形成されてきた認知様態だから、そう簡単に変更することはできない。たとえば今でもぼくたちは、日常生活では天動説を使っている。これをすべて地動説に置き換えるのは不可能だし、かえって不便である。

科学技術コミュニケーションとは、この大きな認知的ギャップに橋をかける作業に他ならない。単なる実践ノウハウの集積などではなく、認識論的にも認知科学的にも非常に大きな、人間の知識のあり方への挑戦的課題なのだと思う。心して取りかかろう。

★科学技術インタープリター養成プログラム
<http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp/>

ワタシのおシゴト 第58回

Rings around the UT

数物連携宇宙研究機構(IPMU)国際交流係

小澤 みどりさん

人と人との交流から宇宙の謎が解ける？



毎日ティータイムで使用する30杯用のコーヒーマシン

世界中から訪れる研究者の様々なサポートをしています。“外国人研究者が如何に快適に過ごせるか”をモットーとしています。日本で当り前のことが、海外では必ずしもそうでない場合が多く、目からウロコの毎日。異なる国籍、文化、制度を持つ者同士のコミュニケーションの秘訣は、ストレートに必要な情報を端的に伝えることです。社交辞令は要りません。魅力的な研究環境作りも重要な仕事です。中でもIPMU名物“ティータイム”の演出には力を注いでいます。そこは、異分野の研究者がリラックスしながら議論を交わす交流の場です。他にも通知文、申請書、WEBなどの英語化、国際シンポジウム開催の支援もします。また、一般市民との交流も大切にしており、事業仕分けや政策コンテストの際は強力なサポーターとなって頂いています。人と人との交流が宇宙の謎を解く鍵を握っているのです。IPMUは従来の考え方や形式に囚われることなく、新しいことに挑戦できる実に面白い職場です。



藤原交流広場にてIPMUの研究者、事務スタッフと

得意ワザ：中国語＞英語

(仕事では英語オンリーなのが辛い！)

自分の性格：干脆爽快(ざっくばらん)

次回執筆者のご指名：古谷博行さん

次回執筆者との関係：IPMU国際交流係のかつての仲間

次回執筆者の紹介：少壮気鋭、前途有為

(将来有望な若きヒーロー！)

コミュニケーションセンターだより No.71

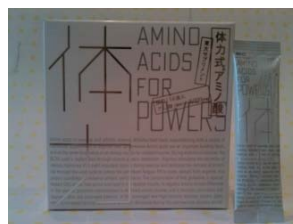
■体力式アミノ酸がリニューアル致しました！！

この度、当店1番人気商品の体力式アミノ酸をリニューアル致しました！(2010年11月24日より)

- ★アセロラ風味から柑橘系のライム風味に！
- ★個包がスティックタイプに！携帯しやすくなりました！
- ★製法を変更し、顆粒の粒形を揃え飲みやすくなりました。

製法の変更により多少の内容成分の変更がありますが、各種アミノ酸、ビタミン等の総量、配合量の変更はありません。従来品と同様にご満足頂けると幸いです。

ぜひ！体調を崩しやすいこの時期に、新しくなった体力式アミノ酸をお試しください！！



体力式アミノ酸
¥2,205

*乾杯式アミノ酸も今後リニューアル予定です！
お酒の席の多い年末年始にお薦めです。

■駒場祭に出店して来ました！

11月21、22、23日の3日間、駒場祭に出店いたしました！

沢山のお客様がお越し下さり、駒場の学生さんから一般の方々まで、楽しくお話をさせて頂きました。人気だった商品は「光触媒の脱臭シート」。この時期、女性には臭いの気になるブーツに入れて使うのがお薦めです。様々な出し物や屋台をスタッフも楽しみつつ、とても盛り上がりました！



■銀杏並木がきれいでした。

11月には本郷キャンパスでは銀杏がすっかり色付きとてもきれいでした。道まで真っ黄色の景色は圧巻です！！

写真を撮られるかたや、写生をされる方も目立ちました。

季節は冬となりますが、ぜひお散歩がてら、コミュニケーションセンターへ遊びにいらして下さい！



担当：UTCC三浦



The University of Tokyo

東京大学コミュニケーションセンター
The University of Tokyo
Communication Center

OPEN：月曜～土曜 10：00～18：00

電話：03-5841-1039

http://www.utcc.pr.u-tokyo.ac.jp



行動シナリオの重点テーマ8「経営の機動性向上と基盤強化」の中に、「事務・事業の見直しを徹底し、経費の一層の節減を図る」という達成目標が掲げられています。今回も前回に引き続き、複合機に関連した経費節減の取り組みをご紹介します。今回ご紹介する取り組みは、主に会議資料作成等で無理なく経費を節減できる「中とじフィニッシャー」の活用です。

現在の東京大学の複合機の契約では、「1面あたりの単価」が課金される仕組みになっています。用紙のサイズは考慮されません。例えば、A4片面とA3片面のプリント料金は同じです(用紙代は別です)。ということは、A3サイズの用紙にA4サイズ2枚分の情報を載せて印刷をすれば、同じコストで2倍の情報を印刷することができるので、大変お得です。ただし、そのままA3サイズの資料を会議で配布すると、かさばりますし、折りたたむのに手間がかかります。その課題を解決するのが「中とじフィニッシャー」です。

中とじフィニッシャーとは、複合機の中で用紙を2つ折りにしたり、2つ折りしたものにホチキスをとめたりする装置のことです。これを導入すると製本作業も可能になります。

A3の用紙にA4を2面割り付けてプリントし、用紙の中心で半分に折り、ホチキス(ステープル)で留めること(左下の図)を複合機が全てやってくれます。

この「中とじ/製本」機能は、事務長会議の資料で早速活用されています。特に会議資料を多く刷る部署・部門では経費節減効果が大きいです。平成23年4月より契約開始予定の次期「情報入出力運用支援サービス」に合わせて導入をご検討ください。

※ オプション品のため、月々の費用がかかります。特に会議資料を多く刷る事務(総務担当部署)等での導入が推奨されています。

【比較: A4で24ページ分の会議資料を作成する場合】

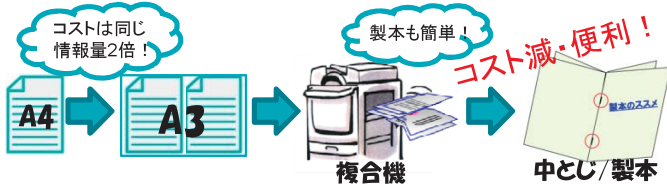
	A4両面で従来通り	中とじ製本
面数	12面(A4)	6面(A3)
プリント	3円×24面=72円	3円×12面=36円
用紙代	0.5円×12枚(A4)=6円	1.0円×6枚(A3)=6円
合計	78円	42円

1部当たり78-42=36円のコストカット

75名の会議なら、5850-3150=2700円(46%)のコストカット

行動シナリオを読もう!

【お問い合わせ先】本部企画課(内線22393)



ニュースページ、インフォメーションページへの記事提出要領

「学内広報」は皆さんから送っていただく記事で作られています。積極的に学内の情報をお寄せください。

1. 提出方法

記事は、各部局の広報担当者を通して、メールの添付ファイルとしてデータで送付すること。

2. 締切日

本学HPの左下にある「学内広報アイコン」をクリックして、発行スケジュールを確認すること。

3. 提出の際の留意事項

(1) 文字数

文字数は記事1件につき800字を目安とし、内容により増減は可とする。

(2) 写真

- ① キャプション(説明文)を25文字以内で添えること。
- ② 電子データ提出の場合、Wordファイル等に貼り付けず、jpeg等の形式による元の画像ファイルを送付。
- ③ 写真は電子データがない場合、プリントのものも掲載可とする。

(3) 書式

- ① 原稿は1行25文字の書式で作成すること(ただし、大きな図表などが含まれる場合は、この限りではない)。
- ② 原稿のはじめに担当部局名と記事タイトルを記載すること。
- ③ 記事タイトルは極力簡潔でわかりやすいものとする。

(4) 文章表現のきまり

- ① 句読点は「、」「。」を用いること(「,」「.」は用いない)。
- ② 時間は24時間表記とし、日付には括弧書きで曜日をつけること。
- ③ 記事内の人名は極力フルネームで表記する。
- ④ 原則的に「平成●年」は削除し、「東京大学」は「本学」とする等、表記統一のための修正を編集段階で行う。

※編集スケジュールの都合上、原則として校正はできません。

基本的には、いただいた原稿がそのまま掲載されますので、内容に間違いのないよう、十分ご注意ください。

※原稿を受け取った後、学内広報担当者から必ず受領メールをお送りしています。返信メールが届かない場合、お問い合わせ願います。

4. お問い合わせ先・提出先

本部広報課 広報企画チーム TEL: 03-3811-3393 内線22031 E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

INFORMATION

お知らせ

お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

「教養学部報」第534(12月1日)号の発行
——教員による、学生のための学内新聞——

「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、学際交流棟ロビー、15号館ロビー、図書館ロビー、生協書籍部、駒場保健センターで無料配布しています。バックナンバーもあります。

第534号の内容は以下のとおりとなっていますので、ぜひご覧ください。

- 川島真 : 日中関係を考える一尖閣列島問題によせて
- 金子邦彦: 2010年のピンボール—村上春樹(1973)でなくワディントン(1957)の主題で—
- 柳原大 : 不整地歩行のスヌメ
- 瀬地山角: GENKI BOOKS 始まりました!
- 嶋田正和: 改装された学際交流ホールと記念演奏会
- 木村秀雄: IARU グローバル・サマー・プログラム
- 小野秀樹: <時に沿って> 語学「家」になった私
- 梶谷真司: <時に沿って> 迷いなき彷徨
- 周防諭 : <時に沿って> 自己紹介
- 森山崇 : <時に沿って> 道
- 学部報委員会: コーナーストーン

お知らせ

大学院農学生命科学研究科・農学部

演習林の広報誌「科学の森ニュース No.52」の発行

「科学の森ニュース」は3ヶ月に1回発行している演

習林の広報誌で、12月10日(金)にNo.52を発行しました。演習林の最近の話題を始め、動植物や名所・名物を紹介するシリーズも載っています。広報センター、農学部正門、農学系事務部、弥生講堂等で配布している他、演習林のホームページからもご覧になれます。

～ 科学の森ニュース No.52 目次 ～

【トピックス】

湖畔広場に新しい東屋ができました

富士演習林
市民公開セミナー「森林環境の保全と持続的な木材生産～初秋の演習林を訪ねて～」が開催されました

北海道演習林

秋の自由見学日

秩父演習林

温室特別公開日

樹芸研究所

【クローズアップ】

地域交流紹介(教育編) - 君津青葉高校 -

千葉演習林 軽込 勉

【演習林のイベントダイジェスト】

【科学の森の動植物紹介】

オオシマザクラ

樹芸研究所

【名所・名物案内】

秋の猪ノ川渓谷

千葉演習林

演習林のホームページ

<http://www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/>



お知らせ

情報基盤センター

「はじめての医学系論文の探し方」ほか
“情報探索ガイダンス” 各種コース実施のお知らせ

年の初めに講習会に参加して、論文の探し方や便利な文献管理ツールの使い方をマスターしましょう!

情報基盤センター図書館電子化部門では、“情報探索ガイダンス” 各種コースを実施しています。

実際にパソコンを操作しながら実習するので、わかりやすいと大変好評です。

本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どなたでも参加できます。ぜひご参加ください。

※どのコースも自宅からの利用方法の説明を含みません。

■ 1/18 (火) 16:00～17:00 はじめての論文の探し方
「文献検索は初めて」という初心者向けにゆっくりと、文献リストの読み取り方、図書、雑誌、日本語論文(CiNii)、英語論文(Web of Science)の基本的な探し方を実習します。(「文献検索早わかりコース」参加者は受講不要)

■ 1/20 (木) 15:00～16:00 EndNote Web を使うには？
Web版の文献管理ツール「EndNote Web」の基本的な使い方を説明します。データベースからのデータの取り込み方、参考文献リストの自動作成方法などを実習します。

■ 1/21 (金) 12:10～12:40
国内の新聞記事を探すには？
(30分のクイック講習会)
朝日新聞、毎日新聞、読売新聞の記事の探し方をまとめてコンパクトにご紹介します。

■ 1/26 (水) 16:00～17:00
はじめての医学系論文の探し方(医中誌 Web と PubMed)

【新コース】

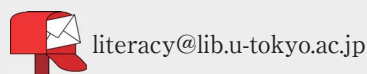
初心者向け。医学部以外の方も歓迎です。医学・薬学・獣医学・看護学・社会医学までカバーする国内の医学文献データベース「医中誌 Web」と、世界最大の医学系データベース MEDLINE の無料版「PubMed」の基本的な検索方法を実習します。(医学図書館の「医学系文献検索入門」参加者は受講不要)

■ 1/28 (金) 15:00～16:00 RefWorks を使うには？
Web版の文献管理ツール「RefWorks」の基本的な使い方を説明します。データベースからのデータの取り込み方、参考文献リストの自動作成方法などを実習します。

月	火	水	木	金
1/3	1/4	1/5	1/6	1/7
1/10	1/11	1/12	1/13	1/14
1/17	1/18 16:00-17:00 はじめての論文の探し方	1/19	1/20 15:00-16:00 EndNote Web を使うには	1/21 12:10-12:40 国内の新聞記事を探すには
1/24	1/25	1/26 16:00-17:00 はじめての医学系論文の探し方 (医中誌 Web と PubMed)	1/27	1/28 15:00-16:00 RefWorks を使うには
1/31				



- 会場：本郷キャンパス総合図書館 1階講習会コーナー
- 参加費：無料
- 予約不要 各回先着 12名。直接ご来場ください。
- ご希望の日時・内容でオーダーメイド講習！
オーダーメイドの講習会を、随時承っています。(無料)
詳細は下記サイトをご参照ください。
(<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/shuccho.html>)
- Litetopi メールマガジン発信中！
本学所属の方を対象に、データベースのニュースや講習会のご案内などをお届けします。配信ご希望の方は、下記アドレスまでメールでご連絡ください。(無料)



literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

- お問い合わせ：
学術情報リテラシー係 03-5841-2649 (内線：22649)
literacy*lib.u-tokyo.ac.jp

(*は@に置き換えて送信してください。)

<http://www.dlitc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>
(ツイッター http://twitter.com/gacos_todai)

お知らせ

保健・健康推進本部

年末年始の業務について

保健・健康推進本部(各地区保健センター)では、年末年始期間中(12/28～1/4)は、通常の診療日程を変更して、業務を行います。ご利用の際にはご面倒でも必ずホームページや電話等で確認のうえ、お越しくさるようお願いします。

お手数をかけますが、よろしくをお願いします。

【お問合わせ先】

保健・健康推進本部のホームページ

URL: <http://www.hc.u-tokyo.ac.jp/>

本郷地区事務室 内線: 22575 外線: 03-5841-2575

駒場地区事務室 内線: 46080 外線: 03-5454-6080

柏地区事務室 内線: 63040 外線: 04-7136-3040

お知らせ

本部広報課

広報センターの年末年始休館のお知らせ

広報センターは今年9月、開設満15周年を迎えました。ここまで続けられましたのは、多くの皆さまのおかげと感謝いたしております。本当にありがとうございました。来年も、ご指導とご協力をいただけますようどうぞ宜しくお願いいたします。

なお、年末年始は下記のとおり休館いたします。

12月28日(火)～1月4日(火)

*年始は、1月5日(水)10時より開館いたします。

お知らせ

本部入試課

平成23年度入学者募集要項配付

平成23年度の本学の入学者募集要項が決定し、11月13日(土)から入学志願者に配付されている。

募集要項配付場所

「本郷地区」

正門、赤門、広報センター(龍岡門)、

コミュニケーションセンター(赤門脇)、

東大生協(安田講堂売店、書籍部)

「弥生地区」

農正門

「駒場地区」

教養学部正門、コミュニケーションプラザ北館1階

生協購買部

※ 東京大学 Web サイトからも請求できる。

テレホンサービス

募集要項の請求方法(郵送)、出願状況(出願者数及び倍率)並びに追加合格の有無等について、テレホンサービス(電話番号: 03-3818-9900)を行う。

募集人員、試験期日、試験場、合格発表日などは次のとおりである。

募集人数

募集人員(人)	前期日程(人)	後期日程(人)
文科一類	401	100
文科二類	353	
文科三類	469	
理科一類	1,108	
理科二類	532	
理科三類	100	
計	3,063	100

出願期間

平成23年1月24日(月)～平成23年2月2日(水)まで

試験日

前期日程 平成23年2月25日(金)・26日(土)

後期日程 平成23年3月13日(日)

試験場

前期日程

科 類	試 験 場
文科一類 文科二類 文科三類	東京大学 教養学部
理科一類 理科二類 理科三類	東京大学 法・文・経済・教育・ 薬・医・理・工の各学部 東京大学 農学部

後期日程

科 類	試 験 場
全科類 (理科三類を除く)	東京大学 法学部

合格者発表

○ 第1段階選抜合格者発表

前期日程

平成23年2月9日(水)13時ごろ、本郷地区キャンパス内(弓道場前)に合格者の大学入試センター試験「試験場コード」及び「受験番号」を掲示する。

後期日程

平成23年3月10日(木)13時ごろ、本郷地区キャンパス内(弓道場前)に合格者の大学入試センター試験「試験場コード」及び「受験番号」を掲示するとともに、合格者には電子郵便(レタックス)により「合格通知書」を、また、不合格者には、「不合格通知書」を送付する。

○ 合格者発表

前期日程

平成23年3月10日(木)13時ごろ、本郷地区キャンパス内(弓道場前)に合格者の第2次学力試験受験番号を掲示するとともに、合格者には電子郵便(レタックス)により「合格通知書」を送付する。

後期日程

平成23年3月23日(水)13時ごろ、本郷地区キャンパス内(弓道場前)に合格者の第2次学力試験受験番号を掲示するとともに、合格者には電子郵便(レタックス)により「合格通知書」を送付する。

〈不測の事態が発生した場合の諸連絡〉

災害等により不測の事態が発生した場合、本学入学者選抜に関する情報提供は次のWebサイト等により行うので、出願及び受験の直前は特に注意すること。

【東京大学トップページ > 東京大学 [受験生の方へ]】

http://www.u-tokyo.ac.jp/index/k00_j.html

お知らせ

本部入試課

平成23年度入試に伴う臨時措置(本郷キャンパス)について

I 平成23年度大学入試センター試験及び第2次学力試験(前期日程)の実施に伴う入構制限等の臨時措置(本郷関係)について

平成23年度の大学入試センター試験(平成23年1月15日(土)、16日(日))及び第2次学力試験 前期日程(平成23年2月25日(金)、26日(土))の実施のため、次のとおり入構制限等の臨時措置をとることとする。

1. 授業の休止

(1) 大学入試センター試験

平成23年1月14日(金)

試験場準備のため、試験に使用する教室について、原則として午後の授業は休止する。

(2) 第2次学力試験(前期日程)

平成23年2月24日(木)

試験場準備のため、試験に使用する教室について、原則として午後の授業は休止する。

平成23年2月25日(金)

試験当日のため、授業は休止する。

2. 試験場区域

試験場区域を次のとおり設定する。

(1) 本郷区域(本郷地区から本部棟・附属病院・第二食堂建物・環境安全研究センターを除く区域)

(2) 農学部区域(弥生地区から地震研究所・農学部グラウンド・野球場を除く区域)

(3) ただし、大学入試センター試験にあっては、「(1)本郷区域」のみとし、(1)及び(2)の区域に通じる陸橋は封鎖する。

3. 入構制限等

(1) 入構許可

試験当日は、「受験者」、「本学教職員」、「研究のために特に入構を必要とする本学学生・研究生」及び「特に入構を許可された者」は入構できるが、その他の者の試験場区域への入構は禁止する。

なお、入・出構の際は、警備担当者の指示に従うこと。また、試験場区域においては、試験の妨げにならないよう静粛にすること。

(2) 「身分証明書」の提示

入構に際しては、次のとおり「身分証明書等」を提示するものとする。

① 「本学教職員」……「身分証明書」

※ 「入試実施本部関係教職員」は、「入試統一腕章」を

着用する。

②「研究のために特に入構を必要とする本学学生・研究生」……「学生証・研究生証」

③「特に入構を許可された者」……「入試特別入構証」
※「入試特別入構証」は、大学入試センター試験用及び第2次学力試験（前期日程）用の2種類とする。

4. 試験場区域への入・出構は、次によるものとする。

(1) 本郷区域

①「本学教職員」、「研究のために特に入構を必要とする本学学生・研究生」及び「特に入構を許可された者」
正門、赤門、弥生門、薬学ゲート、理学部1号館と化学館裏の間、二食ゲート

②「受験者」

正門、弥生門、薬学ゲート、理学部1号館と化学館裏の間、二食ゲート

ただし、大学入試センター試験にあつては、二食ゲートは使用できない。

なお、赤門からの入構は、正門の混雑時及び雨天、降雪時に限り中央実施本部の判断により行う。

(2) 農学部区域

①「本学教職員」、「研究のために特に入構を必要とする本学学生・研究生」及び「特に入構を許可された者」
農正門及び南門

②「受験者」

農正門

(3) 上記の各門及びゲート以外からの立ち入りを禁止する。

なお、龍岡門及び池之端門は平常通りとする。

また、懐徳門と西片門は封鎖する。

備考

1. 報道関係者等

「報道関係者等」は、腕章による識別ではなく、広報室長の発行する「入試特別入構証」により入構を認める。

なお、報道関係者等への対応は広報室を通じて行う。

2. その他

(1) 試験場区域への車両による入・出構は、原則として認めないが、やむを得ない事由のある者の入・出構は、薬学ゲート、二食ゲート及び弥生門、農正門とする。
但し、オートバイについては、エンジンを切った場合のみ入・出構を認める。

(2) 附属病院の業務は平常通りとなっており、附属病院の業務に関連して、試験場区域に入構する必要がある場合には、「教職員」については「身分証明書」、「学生・研究生」については「学生証・研究生証」、「その他の者」については「入試特別入構証」を必ず提示すること。

Ⅱ 平成23年度第2次学力試験（後期日程）の実施に

伴う入館制限等の臨時措置（本郷構内）について

第2次学力試験 後期日程(平成23年3月13日(日))の実施のため、次のとおり入館制限等の臨時措置をとることとする。

1. 授業の休止

第2次学力試験（後期日程）

平成23年3月11日（金）

試験場準備のため、試験に使用する教室について、原則として午後の授業は休止する。

2. 試験場

法文1号館

3. 入館制限等

試験当日は、試験場を設定した当該建物への「受験者」及び「入試関係教職員」以外の立ち入りは原則として禁止する。

4. 試験場への入館

「受験者」及び「入試関係教職員」の出入口については、各建物の指定された場所とする。

備考

1. 報道関係者

報道関係者の入館及び構内での取材については、広報室を通じて行う。

Ⅲ 平成23年度第2次学力試験合格発表（前期日程）の実施に伴う車両通行規制の臨時措置（本郷関係）について

平成23年度の第2次学力試験 前期日程合格発表(平成23年3月10日(木))の際、受験者等の安全確保のため、次のとおり通行規制の臨時措置をとることとする。

1. 規制区域

医学部本館前ロータリー～赤門～正門

2. 規制時間

11:00～15:00

3. 規制車両

自動車、オートバイ及び自転車
(合格発表関係車両を除く)

4. 注意事項

上記2の規制時間帯以外でも、車両での通行の際は、受験者等の安全確保を第一に考え、通行すること。

お知らせ

本部入試課

平成 23 年度入試に伴う臨時措置（駒場関係）について

○ 平成 23 年度大学入試センター試験及び第 2 次学力試験（前期日程）の実施に伴う入構制限等の臨時措置（駒場関係）について

平成 23 年度の大学入試センター試験（平成 23 年 1 月 15 日（土）・16 日（日））及び第 2 次学力試験前期日程（平成 23 年 2 月 25 日（金）・26 日（土））の実施のため、次のとおり入構制限等の臨時措置をとることとする。

1. 授業の休止

(1) 大学入試センター試験関係

平成 23 年 1 月 14 日（金）

試験場準備のため、原則として午後の授業は休止する。

(2) 第 2 次学力試験（前期日程）関係

駒場キャンパスにおける授業ならびに学期末試験は終了しているので、この措置はとらない。

2. 試験場区域

試験場区域を別紙のとおり設定する。入試当日は黄・黒のロープによって、その境界を明示する。

3. 入構制限等

(1) 入構許可

試験当日は、「受験者」、「本学教職員」、「研究のために特に入構を必要とする本学学生・研究生」及び「特に入構を許可された者」は入構できるが、その他の者の入構は禁止する。

なお、試験場区域においては、試験の妨げにならないよう静粛にすること。

(2) 「身分証明書」の提示

入構に際しては、次のとおり「身分証明書等」を提示するものとする。

- ① 「本学教職員」……「身分証明書」
- ② 「研究のために特に入構を必要とする本学学生・研究生」……「学生証・研究生証」
- ③ 「特に入構を許可された者」……「入試特別入構証」

(3) 受験者の入・出構は、大学入試センター試験及び第 2 次学力試験（前期日程）とも、正門のみとする。

(4) 「本学教職員」、「研究のために特に入構を必要とする本学学生・研究生」及び「特に入構を許可された者」の入・出構は、正門（バレーコート脇含む）及び坂下門横とする。

(5) 入試当日、西門・北門（野球場門）・裏門・炊事門・梅林門は閉鎖する。

備考

1. 報道関係者等

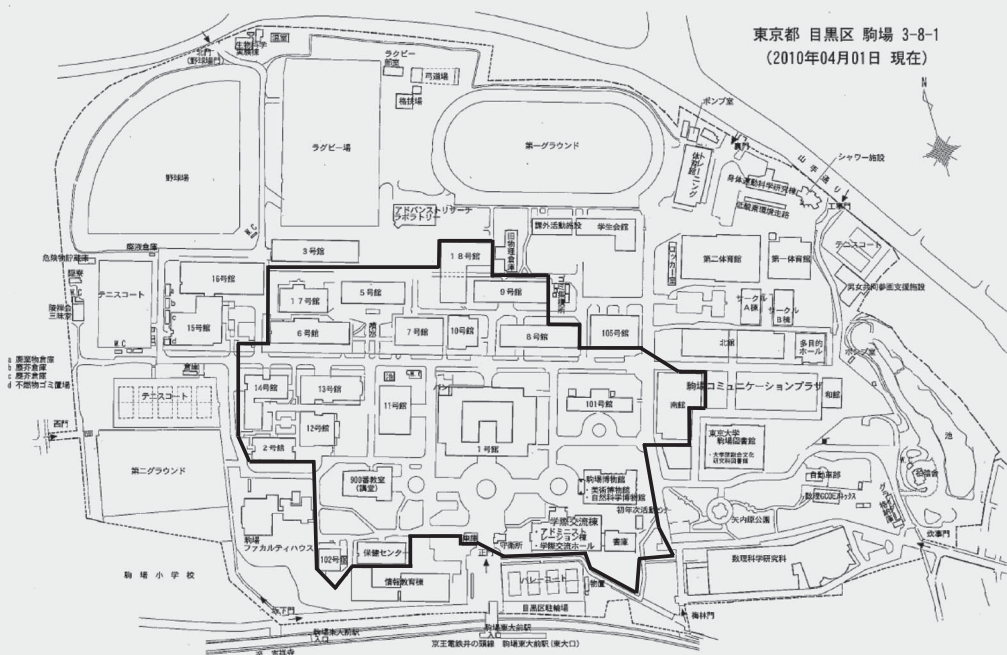
報道関係者等は、腕章による識別ではなく、本学広報室の発行する「入試特別入構証」を所持する者のみ入構を認める（報道関係者の取り扱いは、本学広報室を通じて行う。）。

2. 「入試特別入構証」の発行

「入試特別入構証」の発行手続は、総務課総務係で行う（報道関係者を除く。）。

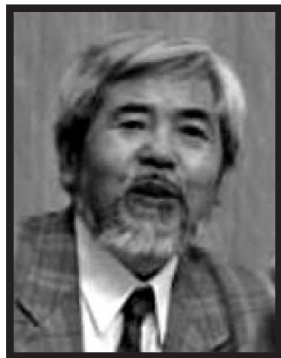
3. その他

入試当日、車輛の入構は原則として禁止する。



宮坂廣作名誉教授

宮坂廣作先生は、2010年10月19日に逝去されました。享年79歳でした。この夏に新しい著書が刊行されたばかりだったので、突然の訃報に研究科の教職員学生一同驚くとともに深い哀悼の念を感じざるをえません。



先生は本学教養学部教養学科卒業の後、大学院人文科学研究科教育行政学専門課程で英国成人教育史や日本の近代社会教育史を研究され、駒澤大学、東洋英和女学院短期大学、お茶の水女子大学教育学部を経て、1970年に本学教育学部助教授に就任されました。1979年には教授に昇任し、1992年停年退官され、その後、山梨学院大学法学部教授・生涯学習センター長、松本短期大学教授を務められました。この間、建設省都市計画中央審議会専門委員、東京都社会教育委員、山梨県生涯学習審議会会長、学内の大学院協議会委員、教職課程委員会委員、総合研究資料館運営委員会委員など多数の要職を歴任されています。

宮坂先生のご業績としては、何と言っても日本の社会教育運動の歴史に関するものが挙げられます。博士論文としてまとめられた『近代日本社会教育史の研究』（法政大学出版局、1968）は、その後のこの分野の研究

者にとって出発点となる労作ですが、そこで研究が止まることはなく、その後も英国の成人教育史も含めて近代教育における教育政策の周辺的な部分や民衆の自己教育の運動に目を向けられ継続して追究されてこられました。また、時宜に応じて教育政策についての発言をされ、生涯学習論、中等教育論、PTA論、大学改革、消費者教育など多数の領域で著作を発表されています。先生のご研究の中心的な部分については、1994年から1996年にかけて『宮坂広作著作集』（全6巻、明石書店）が刊行されたのでそこで読むことができます。

このように先生のご生涯は研究を中心とするものでした。単著だけでも30冊以上を出版したように多作であっただけでなく、どれも深い思考と実証性に裏付けられたものでした。また、一貫して研究者としての厳しさを自らにも他者にも示された方でしたが、他方、何かの拍子に写真にあるようにやさしい笑顔で思い出話をされることもありました。晩年のご郷里である諏訪に戻られて甲府や松本の大学で教える傍ら、地域における生涯学習や文化活動に参加されていました。一昨年には広域諏訪史学会が設立されその理事長に就任し、郷土史の再構築に取り組もうとしていたと伺っています。

大きな視野をもって歴史研究を進め、それをもとにそのときどきの状況に鋭い発言を行なうという東大教育学部のよき伝統を体現された方をまたお一人失った感がありますが、この伝統を今後も継承していけるようわれわれ現役世代は精進していきたいと思っております。

（大学院教育学研究科）

事務連絡

人事異動（教員）

発令日、部局、職、氏名（五十音）順

発令日	氏名	異動内容	旧（現）職等
（退 職）			
22.11.30	GUIMARD DENIS YVES ALIX	辞 職	生産技術研究所准教授
（採 用）			
22.11.16	木實 新一	空間情報科学研究センター准教授	
22.12.1	岸本 康宏	宇宙線研究所附属神岡宇宙素粒子研究施設准教授	東北大学ニュートリノ科学研究センター助教
（昇 任）			
22.11.16	両角 吉晃	大学院法学政治学研究科教授	大学院法学政治学研究科准教授
22.11.16	知花 武佳	大学院工学系研究科准教授	大学院工学系研究科講師
22.11.16	真船 文隆	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科准教授
22.11.16	久保啓太郎	大学院総合文化研究科准教授	大学院総合文化研究科助教
22.11.16	竹内 希	地震研究所附属海半球観測研究センター准教授	地震研究所附属海半球観測研究センター助教
22.11.16	平賀 岳彦	地震研究所准教授	地震研究所助教
22.12.1	芝野 博文	大学院農学生命科学研究科附属演習林教授	大学院農学生命科学研究科附属演習林准教授
22.12.1	蔵治光一郎	大学院農学生命科学研究科附属演習林准教授	大学院農学生命科学研究科附属演習林講師
22.12.1	戸堂 康之	大学院新領域創成科学研究科教授	大学院新領域創成科学研究科准教授
22.12.1	堀田 昌英	大学院新領域創成科学研究科教授	大学院新領域創成科学研究科准教授
22.12.1	吉江 尚子	生産技術研究所附属サステナブル材料国際研究センター教授	生産技術研究所准教授

※退職後又は採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。

東京大学における教員の任期に関する規則に基づく専攻、講座、研究部門等の発令については、記載を省略した。

Contents

特集

- 02 第9回東京大学ホームカミングデイ特集

NEWS

- 08 秋の紫綬褒章受章
10 文化勲章受章
11 文化功労者顕彰
- 一般ニュース**
- 12 海洋アライアンス
上越教育大学附属中学校との遠隔授業開催
13 海洋アライアンス
生物多様性条約第10回締約国会議関連イベントでの活動報告
14 サステイナブルキャンパスプロジェクト (TSCP) 室
東京大学がヒートポンプ・蓄熱シンポジウムにて優秀賞を受賞！
15 本部学生支援課
第34回東京大学伊豆・戸田マラソン大会が開催される
16 本部財務課
第53回 東京大学 対 京都大学 財務部職員 野球定期戦が開催される！！
《昭和58年以来27年ぶりの“3連覇”達成》
17 本部留学生・外国人研究者支援課
「東京大学外国人留学生特別奨学制度平成22年度10月期研究奨励費受給者証書授与式」を開催
17 本部人材育成課
東京大学教職員永年勤続者表彰式行われる
19 本部キャリアサポート課
公開シンポジウム「大学教育と職業との接続を考える」開催
20 本部入試課
入試事務室の設置
20 本部入試課
平成23年度大学入試センター試験の本学割当数決まる
- 部局ニュース**
- 20 大学院農学生命科学研究科・農学部
附属生態調和農学機構・自衛消防訓練を実施
21 大気海洋研究所
堀場国際コンファレンス「西部太平洋域における海洋科学研究の新しい展開」開催される
22 分子細胞生物学研究所
「動物慰霊祭」行われる
22 大学院人文社会系研究科・文学部
イラン大使館より、イスラム学研究室へ蔵書寄贈
23 大気海洋研究所
大気海洋研究所OB会開催される
23 先端科学技術研究センター
第7回アジアがんフォーラム「アジアでがんを生き延びるーアジアのくらしと文化とがん」開催
24 大学院医学系研究科・医学部
医学部解剖体慰霊祭が行われる
25 教育・学生支援部 大学院人文社会系研究科・文学部
大学院教育学研究科・教育学部
大学院理学系研究科・理学部
進路セミナー「『学校の先生』という仕事」開催
25 大学院農学生命科学研究科・農学部
附属牧場で「牧場公開デー」開催される
26 大学院工学系研究科・工学部
核燃料物質・試験研究炉等安全管理功労者表彰で文部科学大臣賞を受賞
27 医科学研究所
医科学研究所で動物慰霊祭行われる
27 大学院教育学研究科・教育学部
『愛の労働あるいは依存とケアの正義論』をめぐってーバリアフリー教育開発研究センターと「ちから研」共催 ラウンドテーブル開催されるー
28 史料編纂所
第35回史料展覧会を開催
28 史料編纂所
絵巻「倭寇図巻」・「抗倭図巻」比較検討のため、国際研究集会を開催

◆表紙写真◆

第9回ホームカミングデイの風景

- 29 生産技術研究所
ツァヒャー・エルベグドルジ モンゴル国大統領、安田講堂にて講演
30 医科学研究所
技術職員研修（分子医科学関係）を開催
31 大学院農学生命科学研究科・農学部
学生による農学部ガイダンスブックが完成

キャンパスニュース

- 32 本学部務課
平成22年11月1日現在学生数 一学部学生 14,112人、大学院学生 13,833人、研究生等 945人

コラム

- 34 ASIAN DIVERSITY No.3
34 決算のDOOR ～数字が語る東京大学 第3回
35 Policy + alt vol.15
36 Crossroad 産学連携本部だより vol.61
37 PC リユースのわ 第14回
37 インタープリターズバイブル vol.41
38 Relay Column 「ワタシのオシゴト」 第58回
38 コミュニケーションセンターだより vol.71
39 FOREST NOW 行動シナリオの「今」をレポート

INFORMATION

お知らせ

- 40 大学院総合文化研究科・教養学部
「教養学部報」第534(12月1日)号の発行
——教員による、学生のための学内新聞——
40 大学院農学生命科学研究科・農学部
演習林の広報誌「科学の森ニュース No.52」の発行
40 情報基盤センター
「はじめての医学系論文の探し方」ほか
“情報探索ガイダンス”各種コース実施のお知らせ
42 保健・健康推進本部
年末年始の業務について
42 本部広報課
広報センターの年末年始休館のお知らせ
42 本部入試課
平成23年度入学者募集要項配付
43 本部入試課
平成23年度入試に伴う臨時措置（本郷キャンパス）について
45 本部入試課
平成23年度入試に伴う臨時措置（駒場関係）について

訃報

- 46 宮坂廣作 名誉教授

事務連絡

- 46 人事異動（教員）

淡青評論

- 48 リスク

編集後記

学内広報編集スタッフの特権で、少し宣伝を。先日、本部広報室全面協力で制作されたAERAムック東京大学『東大へ行こう。』が発売されました！（拍手）この本は行動シナリオに謳われている「女性志願者増に向けた取組の強化」にぜひ照準を合わせた斬新な東大ガイドブックです。どこが斬新なのかは見てのお楽しみ。ぜひ、ご一読ください！（し）



七徳堂鬼瓦

リスク

先日、研究所勤務の知人との雑談で、最近の若い世代は研究においても危険を冒さない、という話になった。その知人曰く、「社会が豊かになった結果、安定志向になるのは、まあ当然である。要は欧米型になったということで、研究を進めるためには外国人に頼らざるを得ない。実際、某国立研究所ではインドに組織的に行脚しているし、自分の研究室でも英語しか使わない、にした」。後継者が育たないことが筆者の悩みの一つであるが、自分の研究はハイリスク・ハイリターン

の典型のようなものだし、生物学とはいえ物理学的思考やセンスを必要とするから、今の日本の教育システムではまあ仕方ないか、とも思う。しかるに、その知人の分野は生物学的生物学で、そういう問題は無いはずなので、吃驚した。

この頃の若い世代の行動原理は「楽しんでひとより良い暮らし」ではないかと思うことが多い。「ひとより」というところが肝心で、自分と向き合わないから「他人との比較」が、それも表面的なものが価値の基準と成る。また、それだから、いつまでたっても「取り敢えず」になるのだろう。大学の予備校化（勿論、就職のための）が言われて久しい。大学院入試の面接の度に、「君の頭にはキーワードしかないのか」とか「一生のことをそれだけで決めていいのか」と叫びたくなる。進学に際しても「取り敢えず」「スキルアップのため」だから、どこまでいっても入門篇で、実にポストクレベルまでそうなっているらしい。

打開策はあるか。ルールがないところを歩いてもらって、まあ何とかなるさ、という自信をつけてもらうしかないのでは、と思う。全学生を何らかの形で海外に、という案があるらしい。修学旅行にならなければ大変有効かもしれないが、たとえば、自分でテーマを見つけ、学内のどこかの研究室を捜して自由研究をすることを必修にするというのはどうだろう。自分もこの道に進むきっかけは、物理学科の学生のときの夏休みの自由研究であったことを思い出した。

豊島 近（分子細胞生物学研究所）

（淡青評論は、学内の教職員の方々にお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報室の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報室までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、本部広報課を通じて行ってください。

No.1407 2010年12月17日
東京大学広報室

〒113-8654
東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学本部広報課
TEL：03-3811-3393
e-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
<http://www.u-tokyo.ac.jp/>